

4

私達建築学科同窓生は 伝統ある
母校を愛し 交友を維持発展させ
る為 互に親睦を図り 相互扶助
の精神を尊び広く建築の諸問題を
研究する事を目的とし 健全な人
間関係の確立と意志伝達の機関と
して ここに規約を定めて 工学
院大学建築学科同窓会を結成する

(同窓会規約前文より)



1972

東京都新宿区西新宿1-24-2 工学院大学学園同窓会事務局内 TEL (042) 1211 内線 297

工学院大学建築学科同窓会

WORK SONG FRANK LLOYD WRIGHT ■

**I'LL LIVE
AS I'LL WORK
AS I AM!
NO WORK IN FASHION FOR SHAM
NOR TO FAVOUR FORSWORN
WEAR MASK CREST OR THORN
MY WORK AS DEFITTETH A MAN
MY WORK
WORK THAT BEFITTETH THE MAN**

**I'LL WORK
AS I'LL THINK
AS I AM!
NO THOUGHT OF FASHION OR SHAM
NOR FOR FORTUNE THE JADE
SERVE VILE GODS-OF-TRADE
MY THOUGHT AS BESEEMETH A MAN
MY THOUGHT
THOUGHT THAT BESEEMETH THE MAN**

**I'LL THINK
AS I'LL ACT
AS I AM!
NO DEED IN FASION FOR SHAM
NOR FOR FAME EER MAN MADE
SHEATH THE NAKED WHITE BLADE
MY ACT AS DECOMETH A MAN
MY ACT
ACTS THAT DECOMETH THE MAN**

**I'LL ACT
AS I'LL DIE
AS I AM!
NO SLAVE OF FASION OR SHAM
OF MY FREEDOM PROUD
HERS TO SHRIVE GUARD OR SHROUD
MY LIFE AS DETIDETH THE MAN
MY LIFE
AYE! WHATEVER BETIDETH THE MAN**

工学院大学 建築学科 同窓会誌

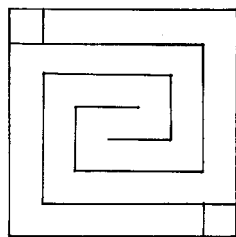
4

◎ 目 次

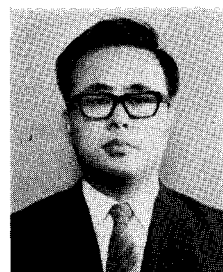
ライトの旅から	南迫哲也	2
天狗祭	久野和作	6
自作自演 my Sweet-Home	常岡貞夫	13
Project コンペ箱根	金田昭治	16
	木村幸弘	
社会福祉と建築計画	宮城干城	20
シリーズ《都市》2 浅草		26
イラク見聞記	藤井正伸	30
ルドルフ・シュタイナー	南口恒夫	35
ヨット部便り 潮路	星野信夫	42
エボシ岩の四季	深沢治男	43
職場を語る	関根康夫	44
運営委員会報告		44
学内コンペ		46
会長あいさつ	金田昭治	48
告知板		48
運営委員住所録		49
編集後記		52



ライトの旅から



タリヤセン・イーストのバルコニー



南迫哲也

(建築34年卒)

ライトが有機的な建築家であるという伝説は永く巷間に流布されている。しかもそのロマンチックで自然の木や石を豊富に使った住宅とか、人間味にあふれた異形の空間は近代の古典として人々の整理箱の隅に既に納ってしまったかのようにみえる。保存の運動はあっても継承の努力は今のところ目につかないのはその何よりの証拠である。

ではライトの作品のもつ意味が今ではそんなに現実ばなれのしたものになり下ってしまっているのでしょうか、またライトの後継者であるべきタリヤセンの建築家達は今、どんな仕事をしているのだろうか、という二つの疑問点について語ることにしよう。

写真

- ①タリヤセン・イーストの階段
- ②タリヤセン・イーストの庭
- ③タリヤセン・イーストの池の端にある滝（落口が斜に削いである）
- ④ジェイコブス・セカンドの入口にある納屋（壁と柱と屋根の構成がステキ）



①



②



③



④

昨年の9月から11月にかけて私はアメリカ大陸の旅に出させていただいた。一人旅は実に私にいろいろの試練を与えてくれた。食事、ホテル、バスの乗り継ぎ、レンタカーの交渉、建物見学の申し込み、など会話を通じての人間的な交わりが実に印象的で、民主主義というのはこんな話し合いの巧さの中でのみ育つのではないかという気がした。一つの大きな文化といわなければならないと思う。それは単に能弁であるというのでは不正確であろう。他人の意図と自分の確信とを一致させるための日常的な関心がもたらす生活態度なのだ。

ライトの文章の多いことは建築家の中でも稀な存在であるが、このことはそんなアメリカ人特有の性格が彼の中にも多分にあったことを示している。

自己の確信とは何かを彼等はあまり追求しようとしないう、ライトについても同様の節がある。例えば自然の草木のアナロジーとしての建築構成を説くとき、草木の自然のたたずまいが、人間空間の自然に合ったものとしてある、唯一の解なのか、はたしてそんなにうまく解答なのか、という問いかけが皆無なのは、一体どういうわけなのだろうか。

ライトの代表的な著書テストメント（遺書）の冒頭に^{かし}樫の木の話が出てくるが、彼の根拠地ウイコンシン州マジソンから車で1時間東に走った、スプリンググリーンにあるタリヤセン・ノースはゆるやかな丘を4つもった広大な敷地に^{かし}樫の大樹が要所に枝を拡げて農地と草地と建物をゆったりと割りつけている。そのたたずまいを見ると、木の配置に合せて人間の空間を配置していった様子がよくわかる。特に初期のホームスクールの建っている部分には大樹が寄り合っていて、敷地の東方のかなたを見下す小高い位置にあり、それだけで、居心地のよい空間が出来ているのだった。ゆるやかな、適度な広さの地面と幹に支えられた枝葉で延びやかなシェルターが造られているそのままで、もう何もいらぬ。こうしたライトの幼い頃からの恵まれた環境は生涯の彼の建築空間の創造の原型として彼から離れることがなかったのではあるまいか。初期のオークパークの住宅群や、後期のユーソニアンハウス、ジョンソンワックス本社ビルや落水荘などすべてに一完しているこの空間概念「地盤とシェルター」は彼に疑いを抱かせるにはあまりにも単純な唯一性を思わせる良さであったにちがいない。

それにひきかえ、われわれの周辺を見わたすと床を切りさいなみ、壁を蜂の巣を思わせるように孔ぼこだらけにした、なんと見すばらしい、せせこましい近代建築が跋扈し

ていることだろう。

私は帰国後、会う人毎に「大きい解決をした建築を…」と言うのが口癖になっている自分に気がついた。ある人は誤解して「ああ大きい建物を造ることがよいですね。そうです日本には小さい家が多過ぎますものね」と言ってくれたりして私をまごつかせた人がいた。意図を明快に解決する空間の原型というものは、無限にあるにちがいない。ただ意図そのものが矛盾を含み、多目的な空間がひしめきあう建築をつくらなければならぬひとつの社会現象をただ否定していればよいというのはまちがいである。19世紀以来のひとつの成果が応用科学の進歩によって到達した。その一つの現われとして、代表選手としてのライトがあったのである。ライトに受け継ぐものは何か？ それはすべての国の伝統と同じように形態にはなくその解決の態度にあるのではあるまいか。複雑化する現代における新たな手段として記号論理学の進歩に負うところが多い現在、こうした現象に対応できる新たな思索を今われわれはすべきときなのではあるまいか。19世紀的な思考方法では既に問題は消化しきれなくなっている。人間の頭脳的能力範囲を超えるものとしての解決を迫られている今日こそ、人間の新たな自然、人間固有の性格性を空間の中に定着する努力がなされるべきときがきているのだ。

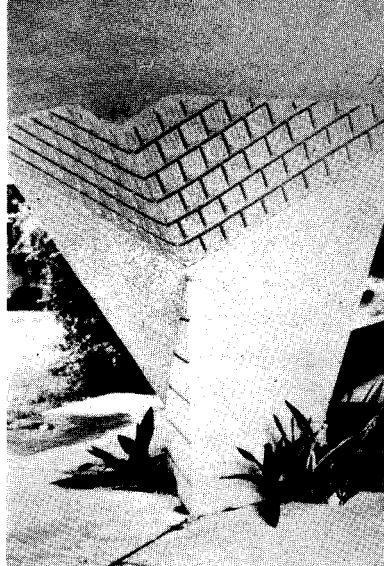
タリヤセンの建築家達は50人余のスタッフで現在もアメリカ大陸の東西にその仕事を営々と続けているが、その作品は優美で舞台セットにも似て、ライトのパターンに終始している。その構造はかつての構想力の雄大なきびしさが影をひそめ、したがってやたらに無理が目立ち、メンバーが太くなり、全体の印象は脆弱である。新しい作品についてはまだ許されるとしても、ライトの名作につけ加えられた増改築の彼等の魔手には啞然とせざるをえない。ユニティ教会に現在行われつつある内装工事の色のけばけばしさは保存を叫んだ者自身による破かいであり、ダラス劇場の収蔵庫増築による入口上部の庇の重々しさは無残だし、フロリダのサザンカレッジの規模増大に伴う研究棟や劇場の無性格さは一体どこから来たのであろうか。タリヤセン・ウエストの池底のペンキは毎年同じように、塗り改められ外部の赤いジュータンは貼り変えられている。しかし広場のかなめにある例のインディアンの石の紋様は消えつつある。人の確信は絶えず生きて変貌する。時代の不連続性の責任は老人にあるのではなく、常に青年に向けて問われているものなのである。そのことを悟るのは青年にあり、そのことを理解してやれる若こそ真の老人といえるのではあるまいか。

⑤サザンカレッジの柱

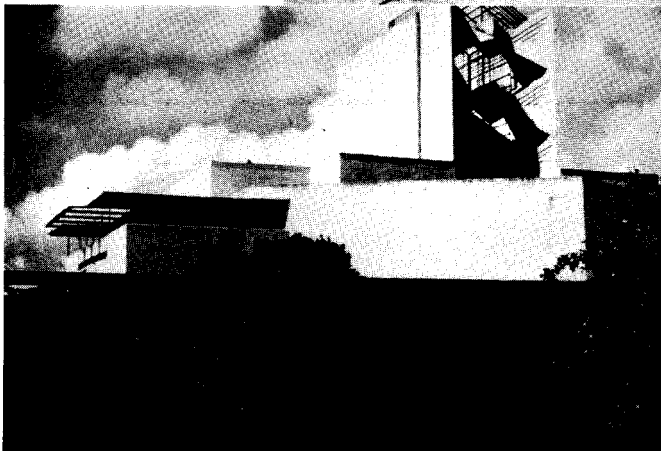
⑥サザンカレッジの教会堂

⑦落水荘の客室棟

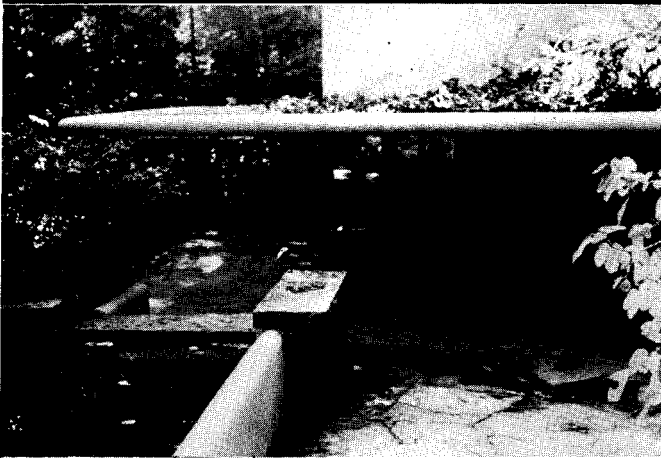
⑧落水荘（庇やバルコニーの配置がステキ）



⑤



⑥



⑦



⑧

天狗祭

■序

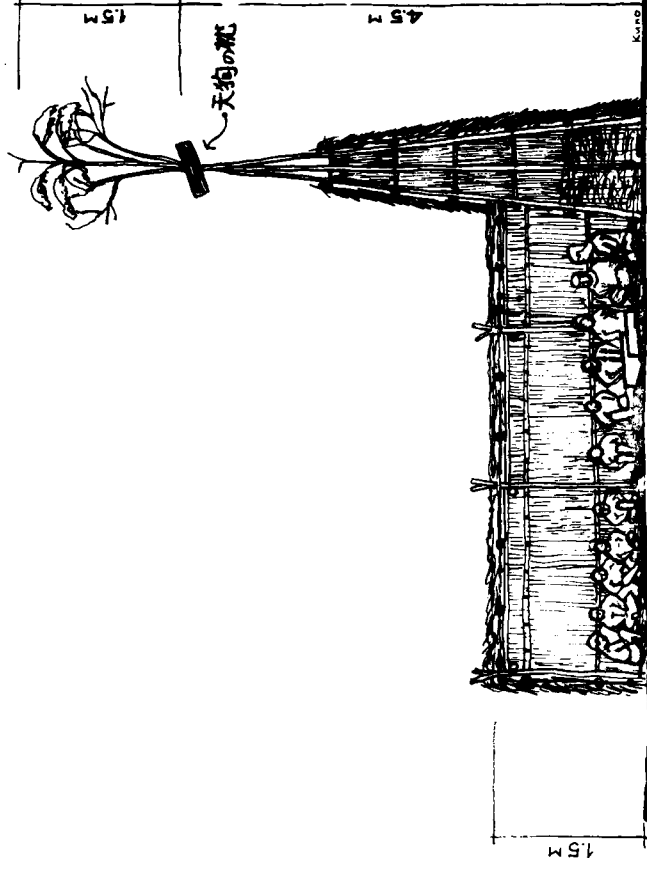
“グリーンング”は、文明の肥満児アメリカでの、新しい社会運動である。

私は、空から降りた水が河川に集まるごとく、不取敢心の拠所となっていた学校から去り、建築界という河川に流れ込んだ現在、なんとか自分自身にとつてのグリーン・シリボリュエーションを行いたいと考えました。

グリーンングとは産業主義はひとつの新しい人間を生み出したそれは機械の要求に適応できる人間だった。逆に今日現われてきている意識は、人間的とはどういう意味であるかについての新しい知識を求めている。それはすでに作られた機械を、人間目的に奉仕させるための探求であり、人間が再び創造力をもった存在となり、人間自身の生活を革新・創造することによって、みずからの社会を蘇生させるための探求なのである。そして、より高度の理性、より人間的コミュニティ、解放された新しい個的な人間の出現を約束するものである。それは究極的に、新しい、しかも永続的な全体と美 — 自分自身・他人・社会・自然・国土などにたいする人間の新しい関係 — の創造をめざしている。(Charles A. Reich 著 “緑色革命” 参照)

私自身にとつてのグリーン・シリボリュエーションのきっかけとして、単に生産ベースからの要求に適応する人間としてではなく、多方的な媒体を通して真の自己をみつめ、もののつくられる起源に触れ、ドラマする空間を体験したいと考えた。

久野和作 (大学院 46 年卒)



天狗小屋断面図

■天狗祭

天狗祭は以前、旧の霜月十五日に行われた。(現在はそれ以前の日曜日に行われることが多い。)今回は11月27日の日曜日秋空の美しい日であった。

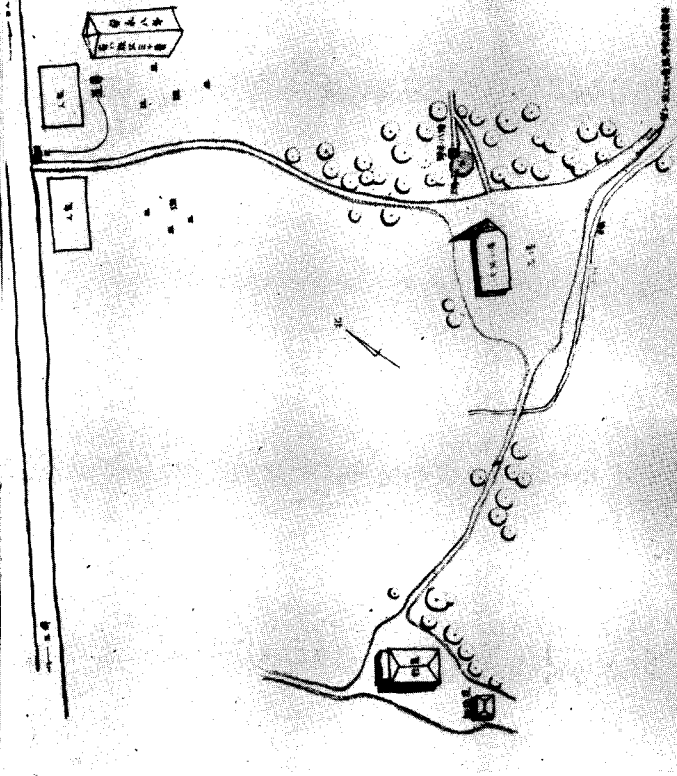
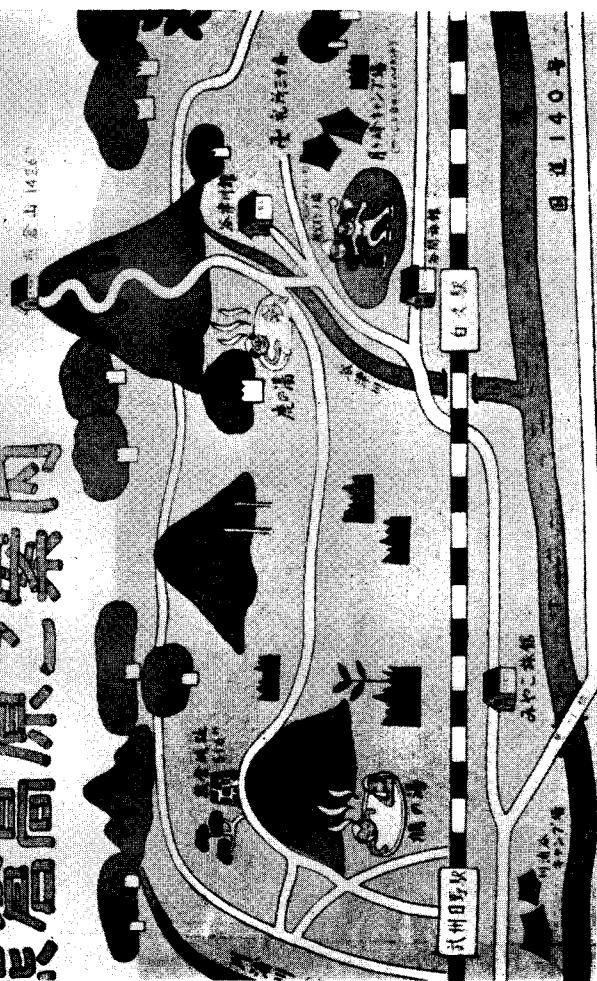
場所は荒川の源、秩父市荒川村白久、池袋より西武池袋線の終着駅秩父で乗換え、秩父電鉄三峰口手前白久にて下車。白久駅か三峰方向に古い街道を思わせる道が、荒川と秩父電鉄と平行に走り、左右はなだらかな山に挟まれる谷間、晩秋の景色は草畑を黄ばませ、日光をさんさんと受け、道行く途中の農家では、蒟蒻の芋が庭先の薙の上に広げられ、老婆がかがんで手入れをしていた。そして土地の人に天狗祭はどこであるのかと尋ねると左前方山の中腹にある松を指さし、あれが天狗の松といい、その前に天狗小屋が作られていると聞き、秩父三十番(臨済宗法雲禪寺という観音寺札所のこと)と刻まれた石碑を左折し、畑の中を抜けて坂道を登ると、小屋の先端が表われ、やがて全貌



天狗小屋

長倉高原の案内

をとらえることができた。そしてある種の感動とともに、脳裡に描かれる像があった。それは村野さんの宝塚カトリック教会のある像である。宝塚カトリック教会のオリジナルかと思ったほどである。不思議なことに建築家として名人の域に達したと思われる作家と、一方全くの素人、しかも子供達の手によって、ごく身の回りにある山や畑の中でも集められた、竹やわらや檜の葉で作られた、ふたつが、特に空にのびる塔の宗教的な感じをいだかせた共通性は果して何から生れるのだろうか。ここでゴシック建築の推奨者ジョン・ラスキンのことばが思い出される。「あらゆる高貴な装飾は人間が神の工作を楽しむことの表現であり、そこで装飾の本来の材料は、神の創造したあらゆるものであらう。そして、その本来の取扱方は神の法則と一致し、または表象するように見えるものである。」



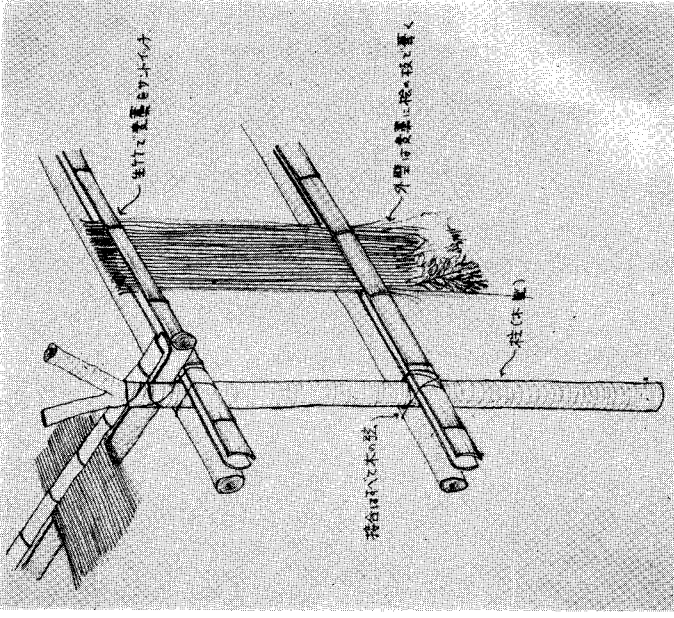
■天狗小屋

天狗小屋は、1ヶ月前から土地の子供（小中学校の男子に限られる。）組の手で作られ、材料は柱、梁は生木・生竹、屋根や壁は割竹にはさまれた、むぎわらに櫓の葉を差込んで葺く。床はわらを敷きつめる。材料集めにもひとつの規則があり、雑木は部落の人の持山などから切り出して差し支えない。山の木は天狗様の所有物と信じているので誰も苦情はいわないのである。しかしその年の陰家（忌服の家）からは竹をもらえない定めで、その家の子供もこの行事には参加しない。

小屋の構造は、骨組としてまず青竹5・6本を三角錐に立て塔とし、上部の交叉を束ね、長さ5m程の葉付きの青竹を御忠柱として中心に立てる。さらに木や青竹で柱梁の小屋組を作る。三角錐の逆には子供の入れる、巾60cm高さ90cmの入口を切る。三角錐の交叉部分には麦がらを束ね縛り付けておく。これは天狗が泊るときに使う枕である。

部落のさし番（当番）は子供組のために、祭の前に各戸から灯明料と称して金銭を若干集める。この灯明料は、ろうそくや駄菓子、酒を買うのに使われる。賄役は部落の女衆で朝から、行屋という囲炉裏のあるタタミの集会所で精進料理やもちなどが作られる。

天狗小屋はすべてこれだけの
道具で作られる

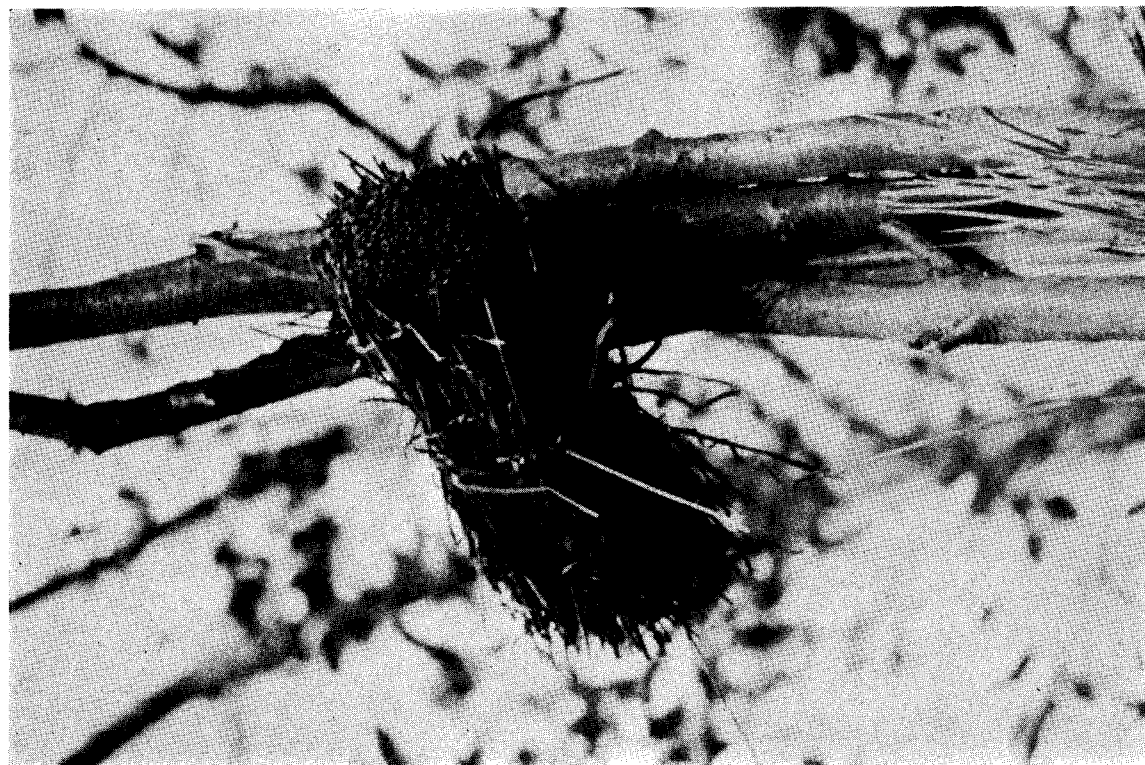


ディテール

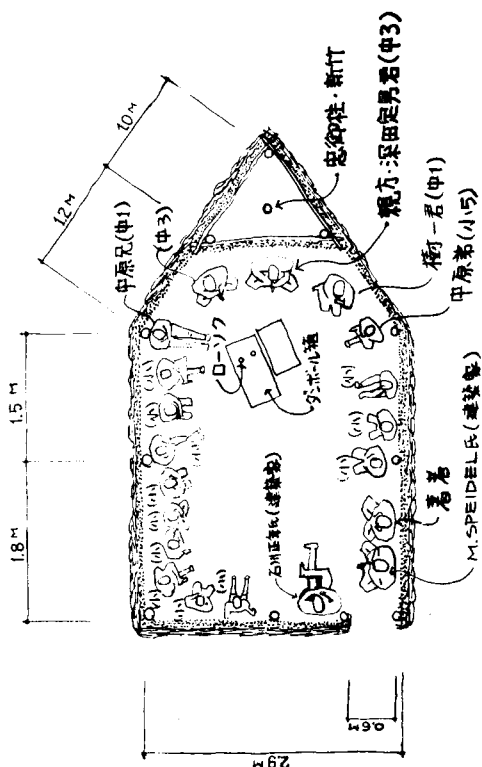


子供組のメンバー構成は、部落の小・中学生の男子だけ
 からなり、(今回は中学生5人小学生12人)。最年長者が親
 方と呼ばれていっさいの統率をとる。(今回はボスの風格
 を持った深田定男君という中学3年生でした。来年は今中
 学1年の2人のうち、どちらが親方になるのか、きまって
 いないようです。)この組織は、偽造された人間社会で
 あり、目上には絶対服従という年功序列といった、厳格な
 ルールや、タブーが存在する。たとえば小屋内には、昨年
 親方を勤めた高校生など一歩も入れず、小屋内の座席につ
 いても、年の順に上座から、末席まである。昔はこの小屋
 で前日に泊ったそうで、子供達にとっては大人の仲間入りの、一
 歩を示す元服的作用をするものとも考えられる。

格の尖端に天狗が
 使う枕がある



平面図 座席にも序列がある



■ 時間的経過

午後12時頃

小屋前の広場付近で、小学生が、木登りや、蔓にぶらさがったりして、遊びに興ずる。タブーとしてまだ小屋内には決して入らない。

3時半頃

事実上の祭の開始。天狗の松の下、琴平・八幡と書かれた高さ1メートルもないミニミニチャのやしろの前にうち揃ってお参りし、おみきやあさごを進ぜる。一升瓶の冷酒を親方の酌により、年少者より順に、ちやわん酒をいっばいづつ煽る。この時、同行の友人を含めて3人だけ。

4時頃

子供達は顔を紅潮させ、小屋前に整列。用意した太鼓を打ちならし、谷間の部落なだにに向かって、「菓子こしをくれるぞー」「菓子こしをくれるぞー」とでるかぎりの声で全員で叫ぶ。するとこの小屋に向かって、3、4才の男女の子供達が小屋から2〜30メートルのところまで駆って来て、お菓子をもらって帰って行く。つぎに、小袋に入った菓子には灯明料を払った家々々の名前があり、それを各家に配り届ける。

4時半頃

小屋前にて、笛の得意な小学、中学生が太鼓に合わせて、秩父音頭を奏する。夕暮れに流れる民謡がこれほど違和感なく聞け、素晴らしいものだった。ことはなかった。

5時頃

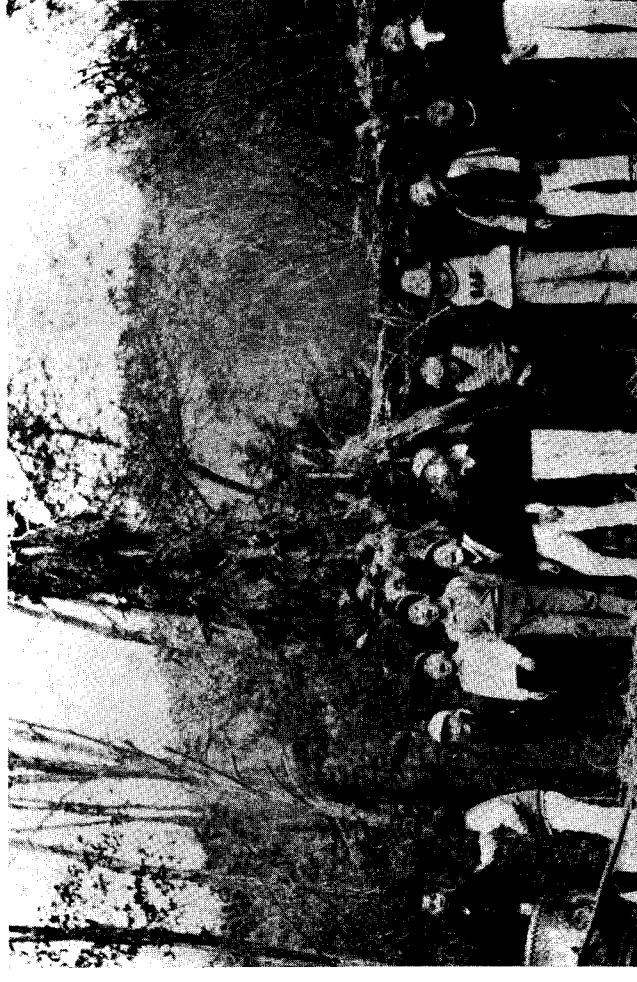
親方が小屋に入ろうと言い、お菓子やみかんを手にして全員小屋に入り、歌を歌い（テレビマンガの主題歌、歌謡曲、校歌等）、ろうそく2本の火の中で



年少者より順にちやわん酒をいっばいづつ煽る。



太鼓を打ちならし、谷間の部落に向かって「菓子こしをくれるぞー」と叫ぶ。



手拍子を打ち、それは楽しいものでした。古くは、この小屋でお籠りと称して、1夜をすごしたそうである。

5 時頃

夕食をとるための行屋^{ぎやうぐや}に向い、女衆によって準備された精進料理を、囲炉裏をかこんで食べる。ある子はケッチン汁を7ハイも食べておなかをブックリとふくらましていた。

6 時半頃

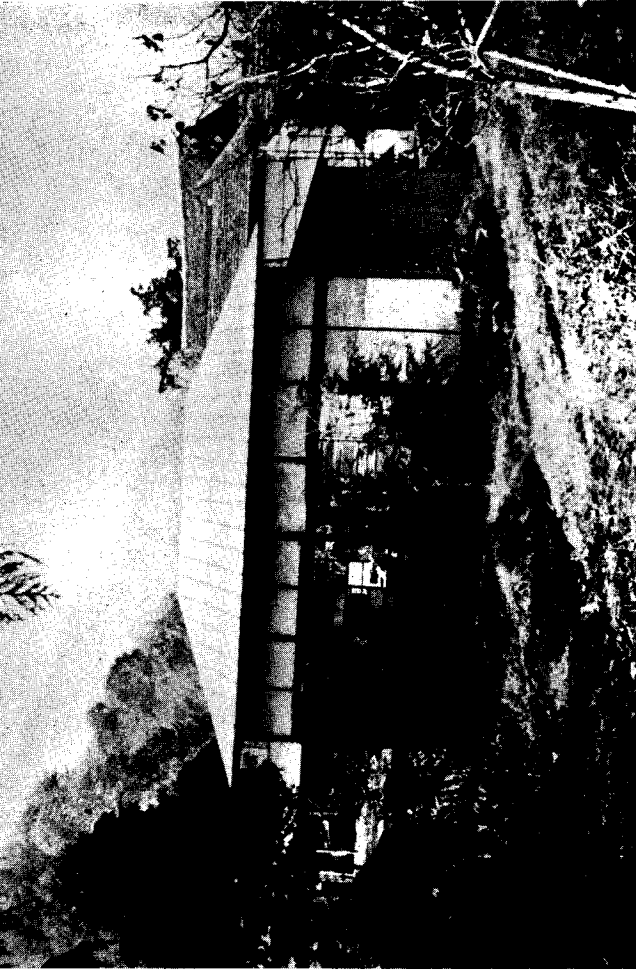
すっかり夜も暮れた小屋に再び戻る。祭もクライマックスとなり、見物人も2・30人にふえ、写真を取ろうと、三脚を立てセッティングし撮影の準備しているカメラマンもいた。

線方は小屋に入り、塔をつくっている三角錐の骨組の柱に方向をもって倒れる様に鉋^{なた}できずを入れ、小屋内のわらを集め油をまき、責任感ある緊張した表情で点火するのである。

点火のあとは小屋中央部から炎が上がり、みるみるうちに小屋はもえ、生木の檜の葉のもえるパチパチという音を聞きながら、子供達は興奮の中で放心した顔で火をみつめ、歓声をあげて騒ぐ。やがて燃え落ちると、竹竿で火をほうり上げる。これが天狗の火と言いこの火にあたれば風邪をひかないし、厄病にもかからない。燃えくずを拾って家の風呂場の屋根にのせておけば火事にもあわないという。つまり天狗様は防火・疫病の守護神であり、火祭は物体を焼却し、清めるための鎮送呪術なのである。

すっかり火だねの絶えた、黒炭を見つめ、顔の火照^{ほでり}もすっかり冬に入った山の風が、興奮とともにさまし、いまここにあった小屋は、目^まに残影として残るだけで、もう現実にはなかった。

子供達は興奮の中で放心した顔で火をみつめる



行屋



自作 自演

my sweet - home



(建築38年卒)

常岡貞夫

春になったら、自分の家に、住めることが、ほぼ、確実に
なって来ましたが、うれしくもあり、又、ほっとしたとい
うところでしょうか。それも、3年らしいの、もやもやが、
晴れたというか、ここに、とにかくある形を、造ったのだ
ということが、実感なのです。後は、この中で、住めばよ
いという安心感でして、ほっとしたというのが、本当の気
持なのです。

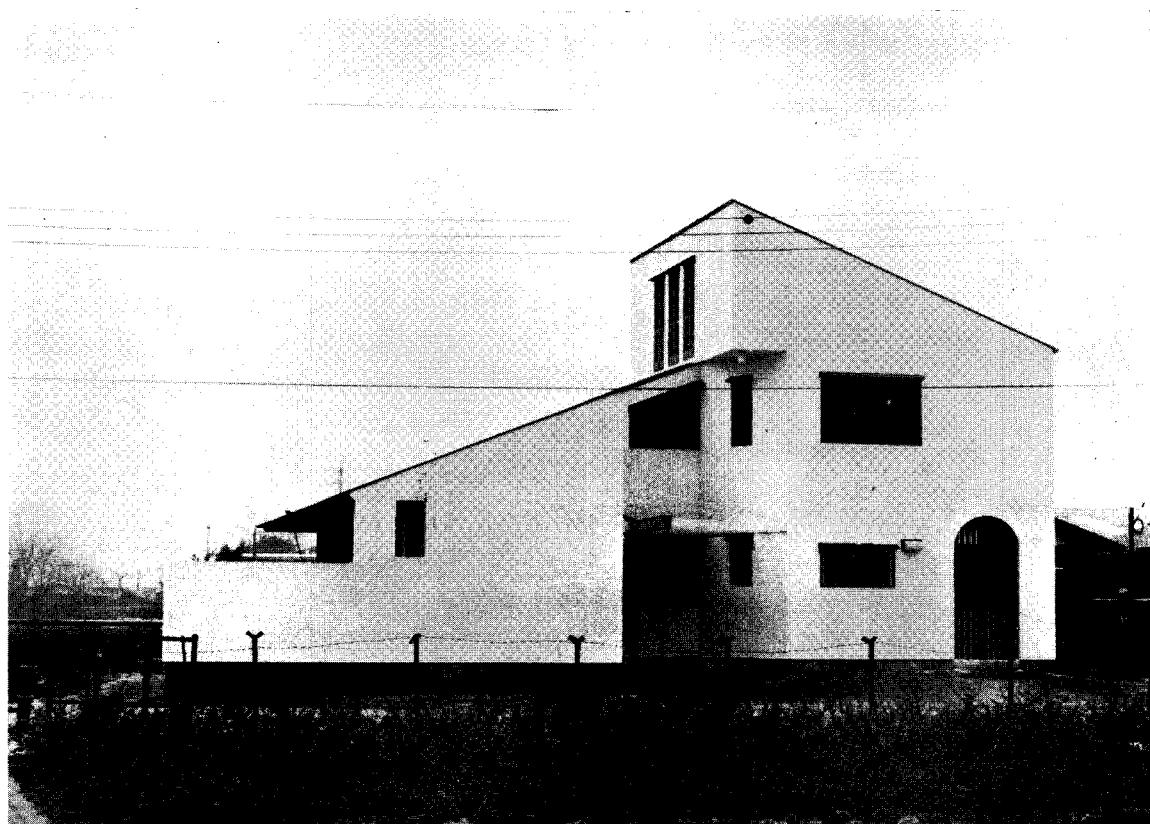
自分の、住まいとなると、完成したという感覚は、持て
ないでしょうが、形として、あるまとまりを感じることは、
出来そうです。

僕は、空間のとらえ方として、四次元の世界を通してみ
て、そのあるイメージの、そのある時点を、とらえてみた
かったのです。その矛盾した空間を、色々とつじつまを合

せて造ってみたいというのが、ここ、2、3年考えつづけ
てきたことなのですが、その点については自分なりの評価
を、後で出してみたいのですが。

路地裏を歩いていて、よく経験するふくらんだ、明るい
ひろがり、壁に、つつまれるようにして出来た、空間
が、僕はすきなのです。そんな、ポーチのある玄関を、僕
は、造りたかったのです。いかめしい玄関や、上品すぎる
玄関は、嫌いですから、ポーチに、立った時に、家の中
が、感じられるという、玄関という壁を、なくしてもみた
かった。

空間には、できるだけ、自由さを残しておきたかった
し、ときには、未完のままにしておきたいという衝動にか
られることもよくありますね。僕のすきなのは、上棟が終



り、屋根の形がきまった時です。それは、木造でも、コンクリートや、鉄骨にしてもそうですが、その美しさを、僕は好きです。それから、壁が出来、床や、天井と、だんだんとりついてゆくに連れ、いつも、ある不安な気持ちを感じるのですが、それは、決断の次元に引きもどされて、あの、迷いの経験に戻るからではないでしょうか。

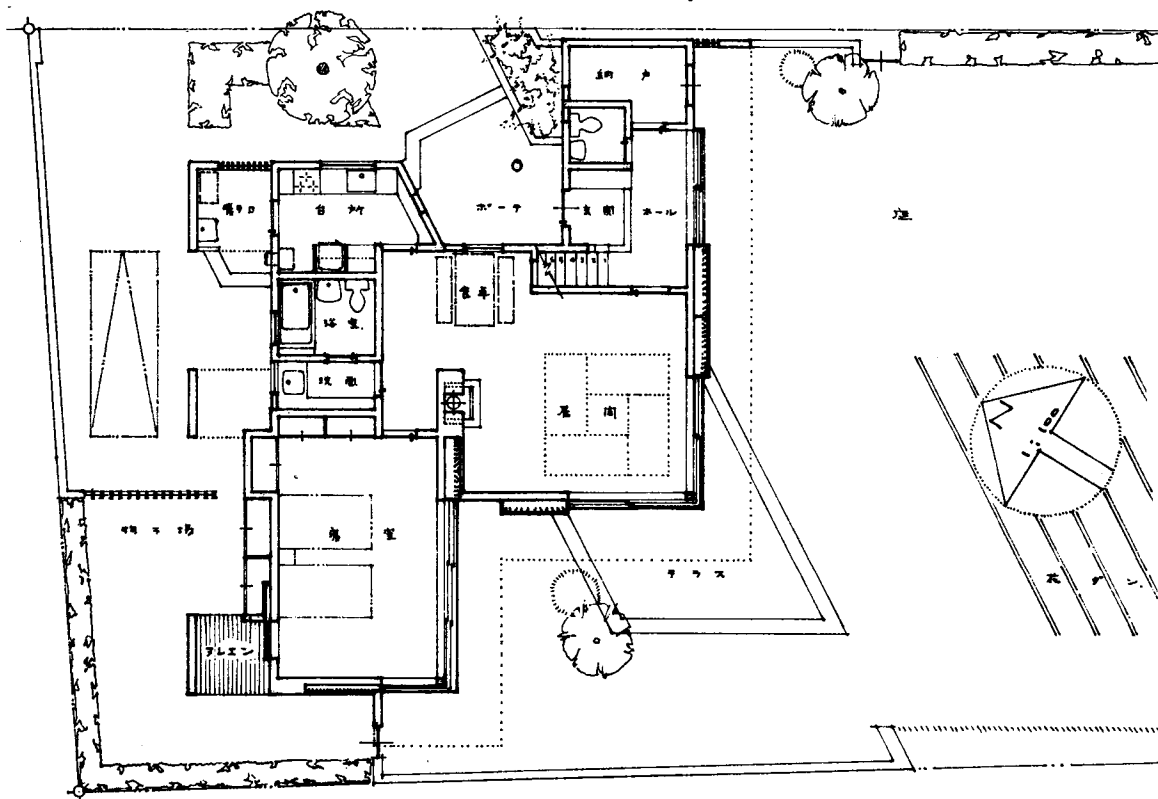
部屋というものを、経験的にとらえるだけでなく、何か、別のよりどころをさがしてみたかった、ポーチを建物の内部に近づけてみたり、二階の室内を部屋としての未完ということに何かを期待したり、また材料としては、タタミとか、土カベ、障子等を、伝統的・習慣的方法から、分解してみたかったり、テラスと、ヌレエンについても、同様のあそびをやってみたのですが、一つ心残りがあるのは、

移る空間というのか、花にも、屋間は開いていて、太陽を受けとめ、夜になると閉じてしまうのがあるように、そんな部屋を一つ造って見たかったことです。

工事は、昨年7月に始め、直営工事ということで、途中1カ月ぐらいは休みましたが、12月には、住めるという予定のもとに、色々とことを進めてゆきましたが、予定は、まさに未定となりまして、あきらめて、春を待つこととなりました。

自分の家を建てることが、これほどまでに、しんどく、むずかしいものだと、思ってもみませんでした。そして、精神的にも、肉体的にも、かなり疲れてきます。それも一様は、わかったつもりで、今までは、お客に対しても、そ

1階 平面図



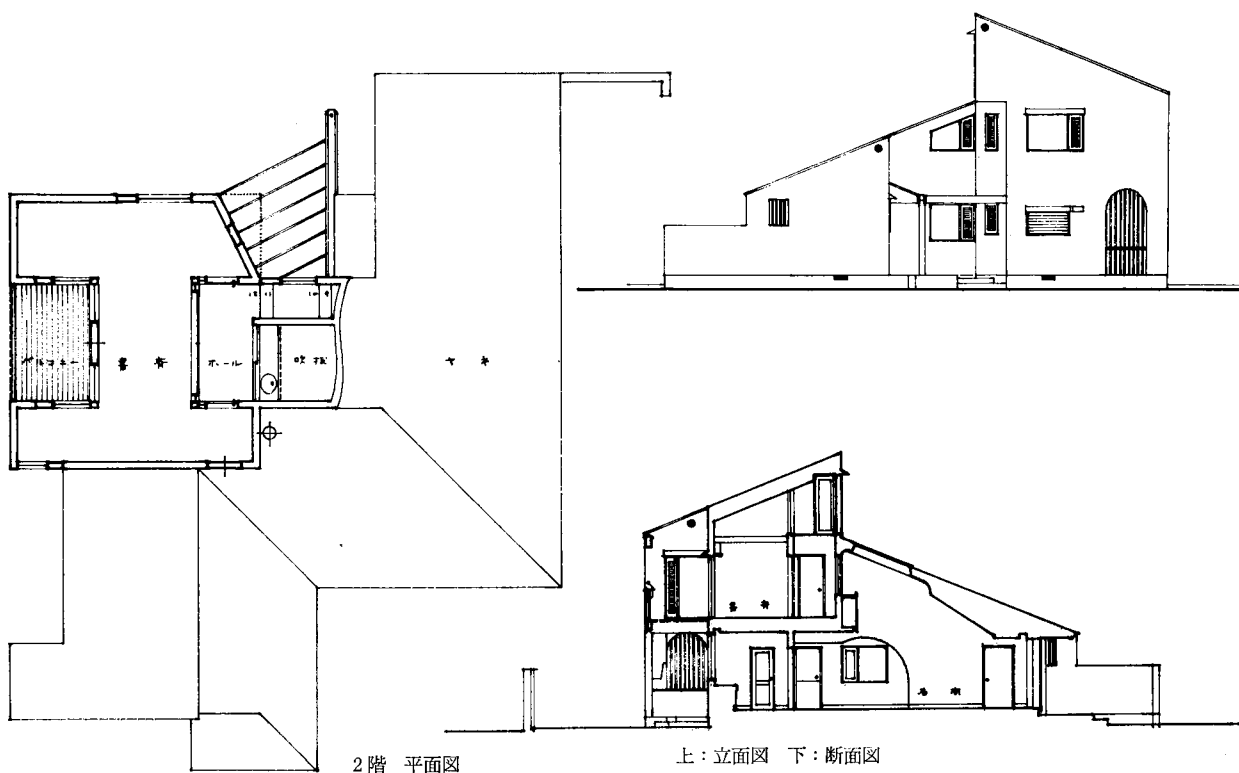
のように云っていた自分が、我が家のことで、初めて身にしみて理解できたと思います。ましてや、これに予算的な苦勞が、かさなったらと思うと、一般の施主の御苦勞にただただ頭が下がります。またこれも、良い施主と、そうではないとでは、少し違いますが。

それにしても、建築費は高いですね。木材に始まり、新建材に至るまで、きれいなものや、便利だと思えるものは、確かに、豊富になり、けっこうなことではありますが、安くてしかも欲しくなるような物が、ないということは、少しさびしいですね。

職人の手間にしても、高い高いと、よくいわれますが、我々の収入から割り出せばの話として、良い仕事をする職人であれば決して、手間が高いと考えるべきではないと

思うし、また、職人の質の低下という問題は、ほかに多くの原因があるのではないのでしょうか。それと同じことで、我々の設計料のこととか、仕事の理解度のことにしても、多くのゆきちがいがあるようですね。それらの問題は経済的、精神的貧しさをも含めて、我々の仕事を進めて行くうえに於ける、かなり重大な問題だと思われます。

この直営工事では、いくつかの経験をする事が出来ました。設計図と大工の板図の關係にしても、また、断面のスケッチはありましたが、現場で矩計を書いたことや、居間の小屋梁の架け方など、紙の上とは、別の新鮮な感覚を、たっぷりと味わいました。直営工事の苦勞の代償は、そんなところでしょうか。



PROJECT

コンペ “箱根”



金 田



木 村

金 田 昭 二 (建築33年卒)

木 村 幸 弘 (建築39年卒)
(文責)

深 沢 治 男 (建築40年卒)

安 原 治 機 (建築42年卒)

正 木 史 郎 (建築45年卒)

藤 森 茂 (建築45年卒)

片男浪孝一郎 (建築46年卒)

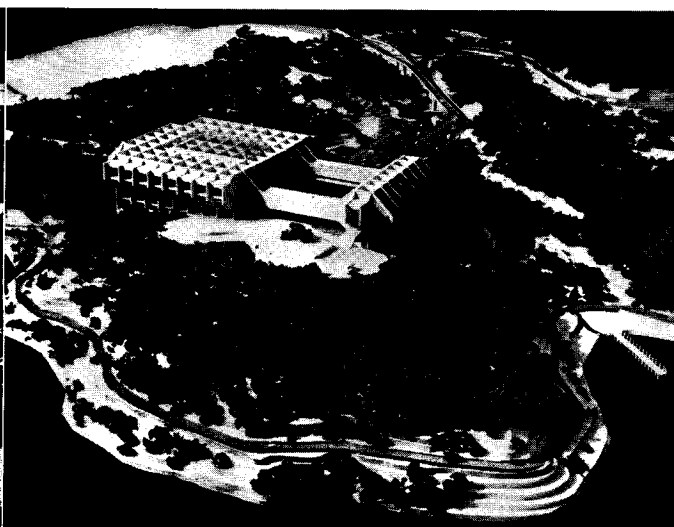
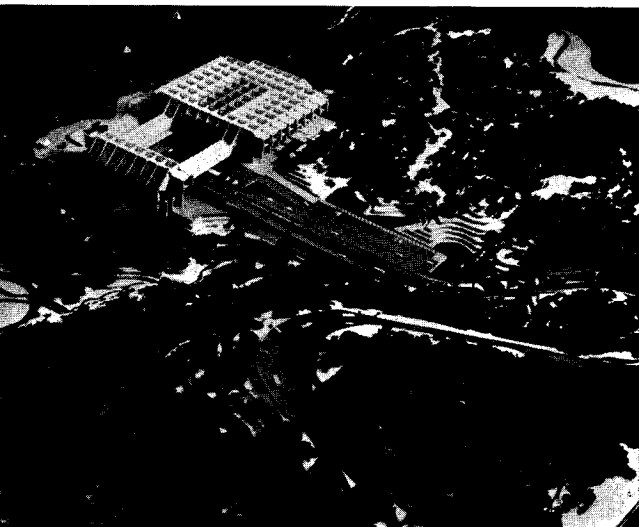
加 藤 正 樹 (建築47年卒)

■コンペ「箱根国際観光センター」に思う

我々の作品は入選した訳でもないのに、発表するにはいささか心苦しい次第である。ふりかえって見るに、当時、東叡寺(新建築46—9 記載)の実施設計を1月下旬に終え、山下先生は観光センターの計画を始めようとしていた。例によって、兵隊要員にメンバー編成されそうだったので、いつまでも私としては先生の手伝いばかりもしておれぬと思い、かねてより、同窓会会長の金田氏がコンペをやっていたことを思い出し、同氏に打診したところ、最初はあまりのり気でなかったがやろうと決ったのが、なんと、2月8日で、9日に敷地見学してようやくスタートし、それからの20日間は戦争そのものであった。

我々のスタッフは金田氏、私こと木村、と同窓生より深沢氏、安原氏、学生から藤森君、正木君、片男浪君、加藤君等の応援を得て苦しかったが、楽しい期間でもあった。その結果は皆さんも御存知の通り山下先生ががんばって入選したが、基本設計(2段階目)でおしくも、選ばれなかった。我々は一次選考には通過したものの入選には遠く及ばなかったようである。報告的なことはこの位にして、このコンペは様々な問題を建築界に投げかけ、大別して次のような事柄があげられる。

- . 設計競技業務受託共同体として、建築三会が初めて協力したこと。
- . 我が国に於いて初めての二段コンペを行なったこと。
- . 本コンペの主催者より箱根国際観光センターの建設が中止されたこと。



等など、建築の中止まで起して、最後まで問題を起しつづけた例もめずらしい。

建築三会相互の内部のゴタゴタもさることながら、主宰者側の不手際、開発に対する安易な姿勢は、お役所仕事の無責任さを、露骨にさらけだしているといっても過言ではあるまい。我々はこのコンペから様々の問題意識を持つと同時に、今後コンペに対してどのような態度で望むべきか、改めて考えさせられた事件であった。

■自然と人工について

自然はそれを見る人々の視点によってさまざまな意味を持つ。詩人にとっては自然は発想の原点であり、土木技術者にとっては戦う相手であり、子供にとっては素晴らしい空想の国であり、農民にとっては限りない力の源である。

ガリレイは次のように言っている「我々の眼前に絶えず開かれているこの偉大な書物—自然は数学の用語で書かれている」と。またデカルトは「人間は人間の経験に目覚めた自己の内面の自律を『理性』の確立として自覚していった。それは『対自然』を発条とする自立の人間の確立といっぴい」といっている。

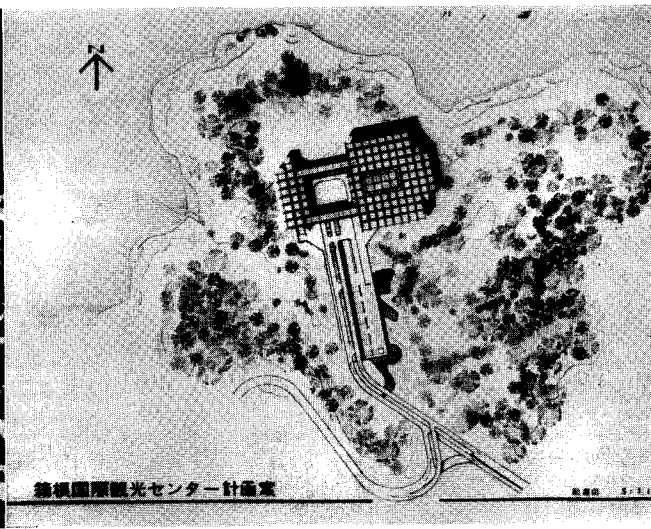
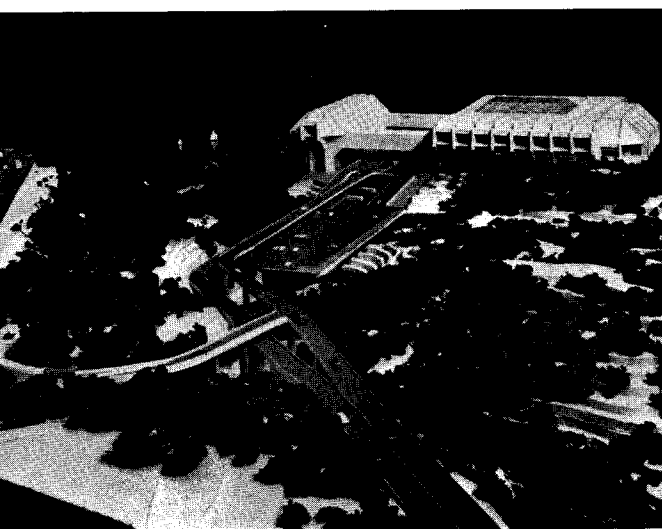
これらの例からも考察されるように、自然には客観的意味とそれを認識する人間を通しての主観の見方とがある。一方人工についても、又、同様である。故にここで「自然と人工」についての考察に当り、自然というものの意味、人工というものの意味を考える意味論の見方、自然と人工との客観的関係を考える構文論の見方、人間との関わり合いを通して自然と人工を考える使用論の見方の三通りのカ

テゴリーをもって進めてゆくことにする。

◎自然には状態としての自然と認識としての自然がある。

認識対象としての自然については、使用論の所で述べる。

状態としての自然を考えるに当って、状態の分析の手段として、微分的分析と積分的分析を使用する。自然とは固定された絶対的なものではなく、一つの状態であり、変化するものであり、時間の関係とも考えられ、その積分的評価とは、歴史的な評価、時間的な積上げ等である。例えば日光の参道の杉並木は歴史的な評価、北海道の原始林は時間的な積上げであると考ええる。一方微分的評価とは変化する関数の変化率の問題であり、少量に対する稀少価値、例えば極端に減少しつつある佐渡の「とき」に対するように、倫理的問題と関わってくる。人工とは自然が必ずしも人間に対して常に都合のよい存在ではなく、好意的な環境であるとは限らない。それ故に人間が自らを守る為に考えだしたものであり、時代が進むと共に、人工は人間が自らを守るという消極的目的の為のみではなく、より一層積極的に自然と取り組み、より一層、人間にとってより良い環境を作る目的で人間が考え出し、発展させてきたものである。木や雲や大地そして海などに直接に接触して生活していた時代には、人間にとって環境というのは、まさに自然そのものであった。人間の生活は太陽と共に自然の中で規則正しく行なわれていた。ところが機械文明の発達と共に人間の生活の場は、自然が次第に新しい人間によって造られた環



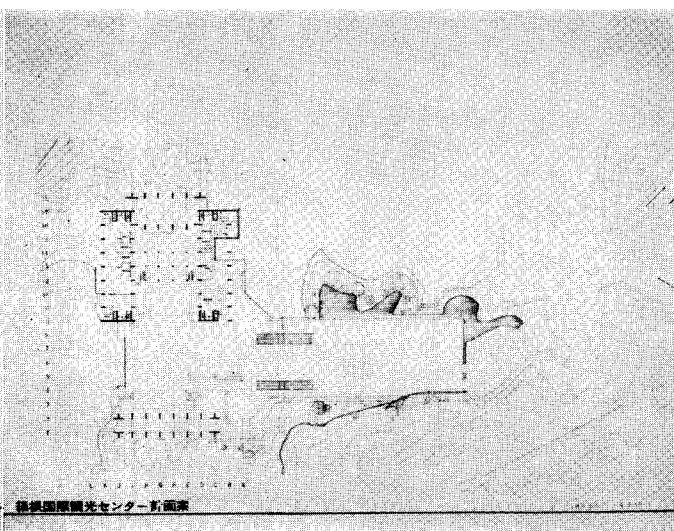
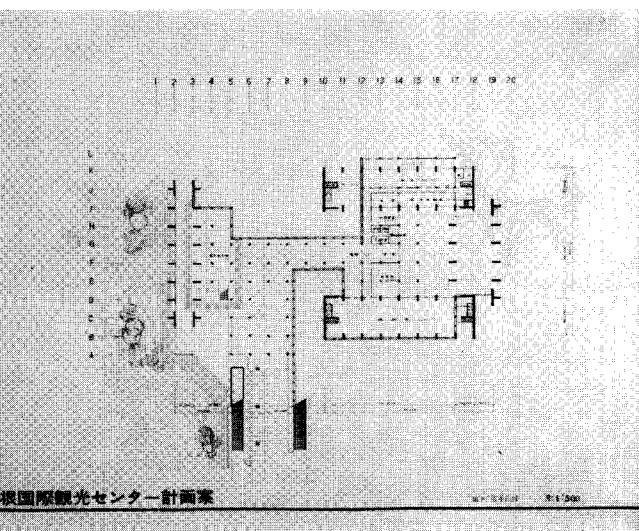
境の中へと移っていった。そして人間は自然と離れ、このような新しい生活環境を新しい自然とでも呼ぶべきものに変えていった。故に自然について深く考えることは、人工について深く考えることと同義でなければならない。つまり人工に対して、より積極的でなければ、自然との共存は不可能なのである。では自然と人工とが、いかに共存し得るのかを次にその関係に就いて考察する。

◎自然は日に日に人工へと変えられてゆく。そして現在では、これらの行為は一般的には自然の破壊であると考えられている。しかしこの現象はエントロピー減少であり、エントロピー減少は生命のそして人間の本性を示すものであるから、それを逆に進めることは不可能である。換言するならば、エントロピー減少は出現確率の大きい自然から出現確率の小さい人工へと向う事であり、そしてまた、これらの現象は自然破壊につながる。一方人間の頭脳は出現確率のより小さなもの、つまり人工物を作り出すことがその特長であるから、この矛盾に対して我々はどのように考えたらよいのであろうか。今、自然を人工に変えてゆくことがエントロピー減少になると述べた。しかしエントロピーの絶対量を減少させても、それが自然に対して均等に作用するなら、その作用の仕方そのものはエントロピーの増大になり、人間の努力の多くの部分を打消していることになる。つまり、我々は人工物を無計画にランダムに自然の中に散らすことによってエントロピーを減少させつつ増大させていたのでありこれが自然の破壊の本性であった。エントロピーをより多

く減少させるには人工物は自然に対して均等に作用させることなく人工物をより秩序化し、集中化して人工物間のエントロピーを減少させ、その人工物集団を自然の中に出るだけ数少なく配置させなければならない。以上エントロピーの概念から自然と人工との関係を考察した。これは自然と人工物の間の関係のみであり次に人間を媒介にした自然と人工物との関係を考えてみる。

◎自然と人工物の関係の間に人間が入って来ると、考察は非常に困難となる。それは人工の意味という問題が重要になり、その意味はそのコンテクスト（文脈）に依存して変化し、逆に自然の意味も、そこに存する人工物の形成する心理的な場の影響下におかれる為である。つまり人工物の新しい意味を人々の間に肯定的に定着させ、また意味の相互干渉によって新しい意味を発生させるのである。例えば高野山は空間的状况では自然の破壊であるが、社会的状況ではそれは破壊とはつながらない。またエッフェル塔も空間的状况の破壊であるが、社会的状況の変化とともに変わったと考えられる。そしてこれらの例でもわかるように新しい人工物の意味に伝統的意味内容の再現を現わすのは不可能であることがわかる。

以上のことから自然をこわして人工物を作ることは、自然の人工物への意味変換と言うことになる。それは換言すれば、意味の荷担体としての記号変換つまり自然が人工物への変換と考えられる。しかしそれはあくまでも記号としての自然が大切なのではなく、自然のもっている意味が大切なのであるから、視覚的には記号変換であっても、これらの重要なところは意味変換と考えられる。



そしてこれらの意味は自然と人工という二者択一の意味ではなく、自然が人工へと連続的に変化してゆくのである。

本計画は前文に述べているように、人工が自然破壊とならない為には、両者の生命のサイクルが同調してゆかなければならない。今後の計画が成功するかどうかはどのような技術をどのように同調させるかに関わるものとする。その関わり方については敷地全体計画の要旨で述べる。

■敷地全体計画について

都市計画的な見解、すなわち交通関係など立地条件等については、要項に示された趣旨が適正なものと考え、計画を進める。

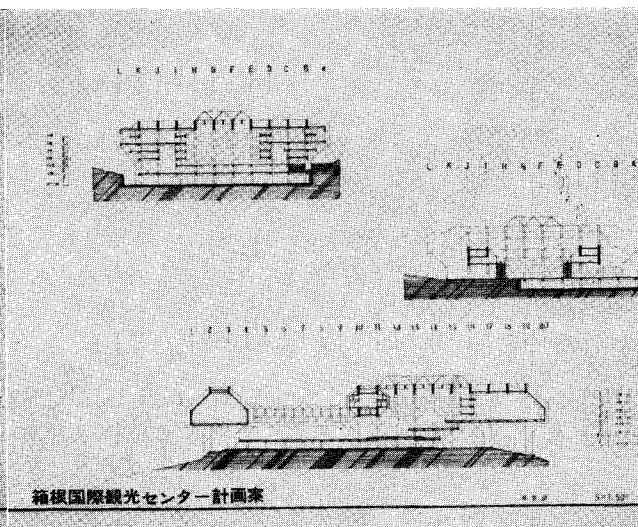
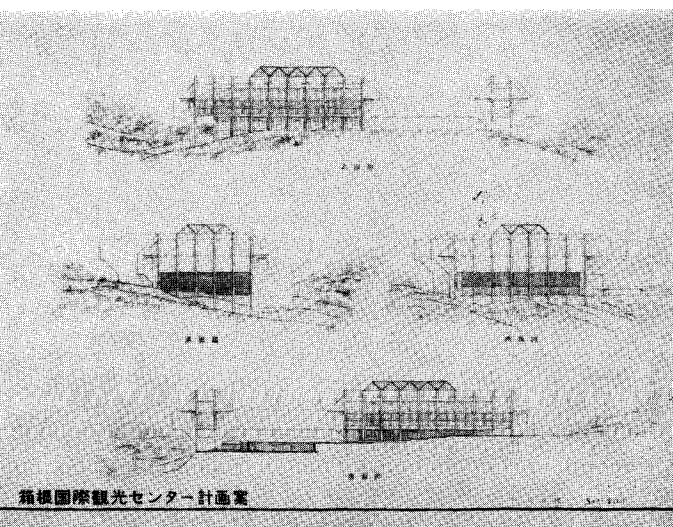
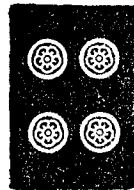
アプローチ道路の国道1号線にそって、北側に位置している敷地は測量図に示されているように、相当量の高低差を有し、機能分析と合わせて、敷地利用計画を考えなければ、自然と人工は同調出来ない。従って進入路の取付位置には、相当な配慮が必要である。

進入路は地形的に両者がフィットし得る位置を考えるに、まず国道1号線のカーブの状態及び高低差の状態を考え合わせて、今後の交通量の増大もかんがみ、取付はインターチェンジとし、一方通行を基本とする。更に、インターチェンジの高低をそのまま生かし、敷地内の高低にそって進入させ、敷地の造成を最小限にとどめるべく、駐車場レベルを標高755 mにおさえ、同レベルに管理関係を納

め地下1階として標高760 mに1階を配し、リターンの道路をそのままのレベル（標高）として立体交又することによって処理した。次に敷地利用計画について述べる。

要項趣旨に示されているように、観光的に最もすぐれた眺望を有し、北西に富士山、北に湖尻、北東に駒ヶ岳と大パノラマの景観を生かさずして本趣旨にかなうことは出来ない。施設の位置に就いてもまた、進入路と同様に周辺の状態を考慮し、且つ地形の特性をそのまま利用する為に、主なる施設を2, 3, 4階に配した。又、展示場は屋外展示場に直接連絡させその機能を高めた。西側の静かな谷を静的な自然のままの公園とし、東側の山の中腹を動的な開放された公園とする。この公園と駐車場を直接連絡せず、駐車場の造成によって生じた谷を池にして、自然の曲線と人工の直線とを水を入れることによって、調和させた。満たされた水は西側の静かな公園に注ぐように考えられている。

施設については主体構造を鉄骨とし、地形等の状況から、その大半をプレハブとする。



社会福祉と建築計画について

宮城干城（文責）
高橋弘和
野口重男
馬場章夫
和田光夫



■はじめに

「社会福祉」という言葉はあまりにも多くの内容を包括しており、しかもそれが多方面の問題とオーバーラップしているため、その学問的体系づけと実践は容易なことではないように思われる。

広義には、国土的なスケールでの自然保護から、公害をなくし住みよい環境を作ることや、医療施設体系の確立とその無料化、教育施設の整備充実など掲げられよう。

また狭義には、いわゆる福祉六法にあげられている生活保護法、児童福祉法、母子福祉法、老人福祉法、身体障害者福祉法、精神薄弱者福祉法のもとに行なわれる福祉活動がある。更に上記の福祉活動を別の視点から大別すると次の二つに分けられると思う。

即ち、1つは Institutional care としての福祉活動であり、1つは Community care としての福祉の働きである。

そして、われわれ建築家にとって、より直接的に関係があるのは前者、つまり Institutional care を行うための器としての建築物、すなわち施設群を計画・設計・施行するという役割においてである。

■社会福祉施設の現況

それでは、そのような Institutional なものとして、どのようなものが掲げられるかといえば、老人福祉法による老人ホーム（これには軽費、養護、特別養護の3種があり、この他に老人福祉施設ではないが、老人福祉法第29条に規

定する有料老人ホームがある）、児童福祉法による肢体不自由児施設、精神薄弱児施設、身体障害者福祉法による身体障害者更生援護施設などであろう。

これらの施設は現在全国各地に散在するが、その施設数と入所を必要とする障害者の数を精神薄弱児者を例にとって見ると表1に示すとうりである。こうした施設の絶対的不足だけを見てもわが国の福祉政策がいかにたち遅れているかがわかるであろう。しかも、現在のわが国における福祉行政は単に貧弱であるばかりでなく、官僚国家の弊害の最たるものの一つとして、セクト化されすぎ、その施設体系は複雑きわまりないものとなっているのである。この為、福祉関係の諸施設（福祉六法に入るもの）の種類は40種以上にもなり、しかも各施設相互の関連性はほとんど持たれていないのが現状である。

表1 精神薄弱児関係施設の充足率

施設の種別	対象者数※	施設数	ベッド数	収容率(%)
精神薄弱児施設	30,900	267	18,871	62
“ 通園施設	9,800	70	2,935	30
その他の施設	24,100	—	—	—
不 明	1,800	—	—	—
精神薄弱者更生施設	43,700	104	7,061	16
“ 授産施設	23,000	324	10,283	44
その他の施設	16,100	—	—	—
不 明	17,700	—	—	—

※対象者数とは施設入所を必要とする者の数。

その結果、福祉施設網全体から見ると、種々の点で無駄が起り、医療、教育、訓練などの設備が二重投資の形になっていたり、また、医師、看護婦、指導員、セラピストなどスタッフの点でも同様なことが起っている。

将来はこうした煩雑な施設体系も整理され、施設によっては互いに関連をとりあって治療、教育、訓練、研究とより効果的な施設体系の確立と運営が行なわれるべきであろう。そして、これまでは建築的にもローコストで魅力的なものといわれて来たわが国の福祉施設も、諸外国のそれのようにもっと豊かで、アットホームな暖かい雰囲気を持った福祉施設が建設されるようにならなければならないであろう。

■社会福祉コロニー建設の機運

以上のような状況を背景として、政府は昭和41年11月の第55特別国会衆議院本会議において「児童福祉法の一部を

改正する法律案に対する付帯決議」を行い、わが国の心身障害児者対策が先進諸国とくらべ大幅に立ち遅れていることを認め、いくつかの適切な措置を講ずることを決定している。

また、同時に国立コロニー建設を具体的に進める為、各界の有識者からなる「コロニー建設推進懇談会」を設置し、以下に記すような7項目からなる「コロニーの目標」を定めている。

- コロニーの目標
1. 心身障害者（児童を含む、以下同じ）が生活の本拠として、一般の地域社会で生活するのと同様な市民生活を営む地域社会であり、相互扶助としての生活共同体である。
 2. コロニーに居住する心身障害者は庇護された社会での生活が適当と認められたもので、これらの障害者は一般社会へ復帰することもできるが、長期居住することが通例であり、さらに必要に応じては終生居住もありうる。
 3. コロニーに於ける援護は主として、日常生活の保護、医療、リハビリテーション、教育などである。
 4. コロニーは従来の精神薄弱児施設などの単なる集合体

- ではないので、比較的広大な地域を占めることになる。
5. コロニーの社会生活はその障害者各人がその能力に応じて積極的に参加するものとする。そこにはお互いに心身に障害があることの共感と共同の生活がある。
 6. コロニーは近接社会と生活の各分野で常に密接な連絡を保ち、その地域社会の一人の市民として生活する。
 7. コロニーは、心身障害者の援護対策として従来にない一つの全く新しい施設体系がつくられる。
- 以上のことを要約すると以下のようなだろう。
- I. コロニーは一つの地域社会であり、そこには一つのコミュニティとして、一般の社会生活とは変らない機能と環境が作られなければならない。
- II. コロニーは単なる地域社会を形成するだけでなく、そこで生活する心身障害者のため医療、訓練、教育の場であり、その為の高度の施設と設備を設けなければならない。
- III. コロニーはそれが閉鎖的な一つの社会とならないために近接の地域社会との結びつきを密接にしていなければならない。
- 以上の観点から、現在わが国で建設が進められているも

表一 2 コロニー計画一覧表

県 名	施 設 名	計 画 内 容									
		精 薄 者		肢体不自由者		重症	計 (人)	職員数 (人)	敷地面積 (ha)	建設年次 (年)	総事業費 (万円)
		児童	成人	児童	成人	心身					
北海道	精薄者総合援護施設「太陽の園」	200	100				400	65	102.4	42～44	67,000
秋 田	鳥 海 コ ロ ニ ー		400		100		500	105	200.0	44～49	81,720
宮 城	精薄児（者）総合施設	200	100				300	—	23.9	44～48	73,875
茨 城	茨城県心身障害者コロニー	50	350		50	100	550	220	66.0	44～49	182,600
神奈川	障害者福祉センター	170	50		100	40	360	250	16.5	44～47	171,200
新 潟	新潟県心身障害者コロニー	100	400				500	170	27.6	44～49	149,900
富 山	精薄者コロニー「セーナー苑」	80	205				285	46	16.1	41～43	21,270
長 野	精薄者総合援護施設「西駒郷」	60	440				500	91	33.1	42～44	67,500
愛 知	心身障害者コロニー	450	350			200	1,000	456	72.0	41～45	410,000
大 阪	大阪府精神薄弱者コロニー	250	600				850	285	86.0	42～47	351,880
和歌山	紀 南 更 生 セ ン タ ー	50	150				200	60	6.6	44～48	52,230
佐 賀	精 薄 者 援 護 施 設		320				320	64	10.0	43～46	35,400
宮 崎	心身障害者コロニー		300	50	50		400	—	30.0	44～46	未 定
(国 立)	国立心身障害者コロニー	50	650	50	650	100	1,500	—	232.0	42～	700,000

ののうち、一応コロニーと呼ばれているものを掲げると表一2に示すとおりである。これは、日本心身障害者コロニー協会が1969年4月現在で掌握している各府県の計画概要である。

これで見ると、心身障害者の種別では精薄児だけを対象とした施設が14施設中8施設もあり、総合福祉コロニーといってもまだまだ単独型が圧倒的に多い。

複合型では精薄児者の他に肢体不自由児もしくは、重症心身障害児を含むコロニーが4～5施設ある。しかし、これらのコロニーでも単なる雑多な寄せ集めの感が強く、重症児をコロニーに入れている府県にこれまで同施設が目立って少なかったことから、施設の絶対的不足をなんとかしようという程度にとどまっていることがうかがわれる。

規模としては、大きいところで国立高崎コロニーの1,500人、愛知の1,000人、大阪の850人（将来1,300人の計画）があり、小さいところでは200～300人前後のところもある。

また、敷地面積も国立の232ha、秋田の200haから、和歌山、佐賀の10ha前後のものまであり、同じくコロニーといっても収容人数、敷地面積などの規模は各計画ごとに大きな差がある。

しかし、コロニーと銘打っている以上そこには既存の施

設とは異なった高度の体系のもとに新しい可能性を求めた治療、教育、訓練が行なわれるべきであって、その全体計画にあたっては充分な配慮がなされなければならないであろう。

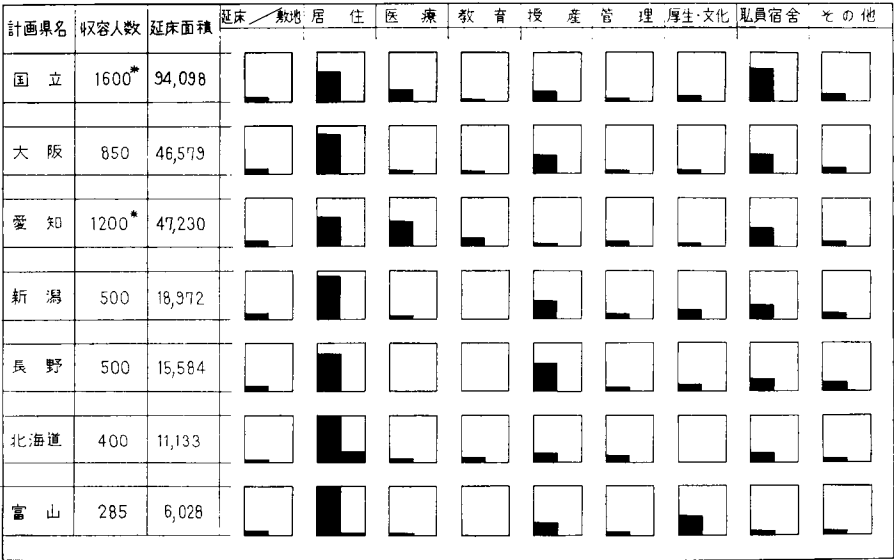
■コロニーの持つ矛盾

それでは、こうして御上の一声のもとに雨後の竹の子のように次々と各府県でコロニーを建設を進めているが、そのメリットはどの程度あるのだろうか。そこから本当に新しい福祉の可能性が生れて来るのだろうか。

国立のコロニーは些か一つであり、他は全て各地方自治体で計画している公立のコロニーである。たかが1つや2つのコロニーを国が建設したからといって、現在のわが国の障害者福祉の問題が解決するはずはなく、むしろそこには何か目立った大きなことを1つして、他の多くの福祉問題における政治的貧困とひずみを被い隠くそうとしているようにも受取れるのである。

ともあれ、現にいくつかの府県でコロニーが建設されつつあることは事実であり、そのメリットとデメリットはどのようなになっているのであろうか。

図一1はわれわれ（筆者と研究を共にした44年度の卒論生諸君）が調査したコロニーに施ける部門別面積構成百分



*国立 100、愛知 200の総合病院病床数を含む

第1図 主要コロニー計画に於ける部門別面積百分率

率である。これで敷地利用率をみると敷地面積に対し、延床面積の占める割合が一般の建築に較べると極めて低いことがわかる。平均的にはほぼ4～6%の間にある。これに対建築面積でみれば上記の値は更に低くなりおそらく3～5%となるであろう。(調査時点では計画段階のもあり、建築面積を調べる事が出来ないものがあった)

つまり、敷地の90～95%が空地なのである。これ程豊かな敷地を持った建築は他に例をみないであろう。「コロニーの目標」でもうたわれているように、コロニーがこれまでの単独の施設と異なる大きな特色の一つは広大な敷地を必要としていることである。これは単に収容規模が大きくなったためばかりではなく、彼らにより豊かな生活環境を創り、高度の指導・管理体系をそこにうち建てようとするところから来ている。

確かにいくつかのコロニーに実際行ってみると、実に豊かな敷地を持っているのにまず驚く。コロニーの近くまでは舗装もしてない砂利道だったのが、コロニーの敷地に一歩入ると立派な舗装道路となり、長い気持ちの良いアプローチを車で走りながら素晴らしい林や川を眺め、ある時はウグイスの鳴き声が森の中から聞え、野生のキジが路上を歩いているのさえ見たことがあった。空気は澄み、景色は良く、静かな環境……。

だが、その素晴らしい広大な敷地も彼等にとってどれだけ有効な働きをしているだろうか。彼等のコロニー内での日常生活の行動範囲とあの広大な敷地とがどの程度までうまくかみ合っているのだろうか。特に Mental な Handicap を持った児童たちが日常生活において、どれくらいの範囲で空間領域を認識しているのだろうか。あの広大な敷地の中で彼等はヒューマン・リレーションをどの程度までとれるのだろうか。

そうした幾つかの基本的な問題が究明されないままに、どうしてあの広い敷地に全体の配置計画や、住区計画、あるいはユニットやファミリーの構成が出来るのだろう。

また、「コロニーの目標」の一つである広大な敷地を必要とするが為に、まさにその為に、地価の安いへんびな山奥に土地を求め、結果的にはコロニーの目標の他の一つである「地域社会との密接な関係」から遠ざかるという矛盾を生み出していることも見逃せないのである。そればかりか、その為にスタッフの確保が難しくなり、「高度の指導・管理体系」を確立することを困難にしている。

更に現行の福祉六法ではコロニーの法的位置づけはなされていない。その為コロニーという一つの総合施設でありながら、その中では児童福祉法、身体障害者福祉法などバ

ラバラの法的処遇のもとに運営され、それをまとめる為にコロニーの長たる者は絶大の管理能力を求められるし、また各施設間の連携を良くするため、むやみに会議が多くなるという欠陥も生じている。

現在わが国が行っているこうした総合化した大規模コロニーを建設して、社会福祉をカバーしようとする考え方は元来アメリカに於て発達して来たものである。しかし、先にも述べたように、福祉活動には Institutional care に対し、Community care があるが、これは相互が密接に関連し合って行なわれてはじめて社会福祉の網が完全にかかけられるのである。

これが大規模コロニーの場合、上記の理由やその他幾つかの理由で必ずしもうまく行かない点があるのである。ここ数年来、本家であるアメリカでもこの大規模コロニーに対し否定的考え方が多くなり、ヨーロッパでみるようなパビリオンタイプで、しかも比較的小規模な施設を社会全体の中に分散させる方向に進みつつあるといわれている。即ち、アメリカやそれになっている日本のコロニーのあり方は、それを受入れるだけの社会的下地が出来てないところに、かなり強引にしかも機械的に総合福祉コロニーを建設するところに問題があるように思われるのである。

たしかにヨーロッパにも西ドイツのコロニー「ベートルの家」にみるように5,000人あるいはオランダの「ペースティッテン」の1,500人といったような大規模のものもある。しかし、これらはいずれも民営であり、しかもベートルの場合、100年余りの歴史を持ち、最初は教会関係者が数人のテンカンの子供を救済するため、一軒の農家を買とりそこで能力に応じた仕事をさせるという目的で発足したのがその第一歩であった。

それが年月を重ねるとともに自然に大きくなり現在その中心は「ベートルの家」であるが、エカルドハイム、ホッホシグスタール地区などの別の地区にも施設を持ち、精薄や身体障害のある人々は勿論、移民や非行少年などあらゆる人々の施設も併設されている。従って中心となっているベートルの家(正式名は「フォン・ボールシュヴィング施設」)の収容能力は、保護を受ける人々4,300人、世話をする人2,700人、合計7,000人であるが、コロニーの総人口は約11,000人もの大規模なものである。

そこには、そこで生活する人々の住宅や作業場のほか老人ホーム、ゲストハウス、教会、病院、郵便局などのほか、小学校4、中学校2、高等学校1などの施設もととのい、それは施設というより、まさに一つの地域社会を形成しているのである。そして、それが100年余りの歴史を必要

とし、その間2,000人も^{かん}の奉仕者の墓をそこに築かなければならなかったという事実を忘れてはならないであろう。

■今後の問題

以上、社会福祉というものを総合福祉コロニーを通して簡単に考察してみた。論の進め方に不備な点はあったが、社会福祉活動はこれまでのような固定的かつ硬直化したいわけの Institutional care だけではもはや対応するにはあまりにも不十分であるということが言えるであろう。

そして、われわれ建築を^{なりわい}生業とする人間は、えてして Institutional なものだけに視点を向けがちであり、しかもそれが大規模であればある程魅力を感じるものである。50億、100億の仕事といえればそれだけで充分である。その計画が本当に必然性のあるものなのか、あるいは進むべき方向なのかはや問題としなないところがある。

例えば八郎潟干拓計画もその一つであろう。今から10年前までの日本の農業政策は米作中心で進められていた。その時点で増産の為八郎潟大干拓計画が進められて来た。数十億、或いはそれ以上の金を注ぎ込んで。それが未だ完成をみないうちに政府の減反政策実施。この為、干拓地の水田を畑作に切りかえたり、それでも入植者が少ない為最近ではローカル線の空港にする案が有力だという。

10年前、八郎潟計画がスタートして今日までこの計画に参画した建築関係者は世間の耳目を集めたその規模の大きさと華やかさに、喜々としてあるいは得々としてその計画策定にあたり夢物語りを絵がいて来たことであろう。しかし、その夢物語りも終らないうちに社会情勢は全く違った方向へ進んでいたのである。

建築家はその時点において5年、或いは10年先を予測出来なかっただろうか。未来を先取りすることが出来るのが建築家の一つの特性ではないだろうか。御上の一声には全く無力なのが建築家なのだろうか。その意味においては建築家はやはり体制側なのであろう。

今のコロニー計画も同じような危険に落入る可能性を多分に持っているように思われてならないのである。

そこで、今後われわれが福祉施設のあり方について計画を進めていく場合、同様な誤ちに落入らない為にも以下の点について十分な配慮をする必要があろう。

第1に、社会福祉施設をコミュニティから隔絶されたものとして設置するのではなく、利用施設のみならず収容施設もまたコミュニティ施設として配置する考え方が前提にならなければならない。まして、利用施設につ

いては、たんに対人口割で配置基準を設けるのではなく、利用者の特性に応じて誘致距離基準を設定して、キメ細かく配置する必要がある。

第2に、地域住民の潜在的なボランティア・エネルギーを開発するためコミュニティ・オーガニゼーションの活動を展開する必要がある。これは Community Careに欠くことのできないものであり、福祉施設網の体系を考える場合に建築家といえども忘れてはならない問題である。

第3に、社会福祉は基本的にはコミュニティへ志向しつつ展開されなければならないことは言うまでもない。

コミュニティ・ミニマムの基準を設けた福祉施設の配置（福祉センター、児童館、老人福祉センター、援産施設等々）、在宅者サービス、対象者組織の育成（老人クラブなど）、ボランティア・エネルギーの開発などを、いかに有機的に結びつけていくかを考えて福祉施設網の計画を考えていかなければならない。

■日本建築学会コンペ応募後記

このコンペ・リハビリテーションセンターは1970年の秋に行なわれた。小生と調査研究を共にした卒論生との協同作品である。卒論生も就職してまだ半年目で、社内でも自由にならず毎日会社を終えてから夜更けまでのコンペは大変な苦勞だったと思う。作品は学会に直接提出したが、枚数オーバーで規定外と宣告されてしまった。“敗戦の将、兵を語らず”とか。前稿の小論で多くのページを使ったので、今回は作品についてはふれず、メンバーを記すことでお赦し願うことにしたい。

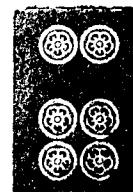
松本保子（旧姓橋本、田中建築設計事務所 42年卒）

高橋弘和（大豊建設設計部 44年卒）

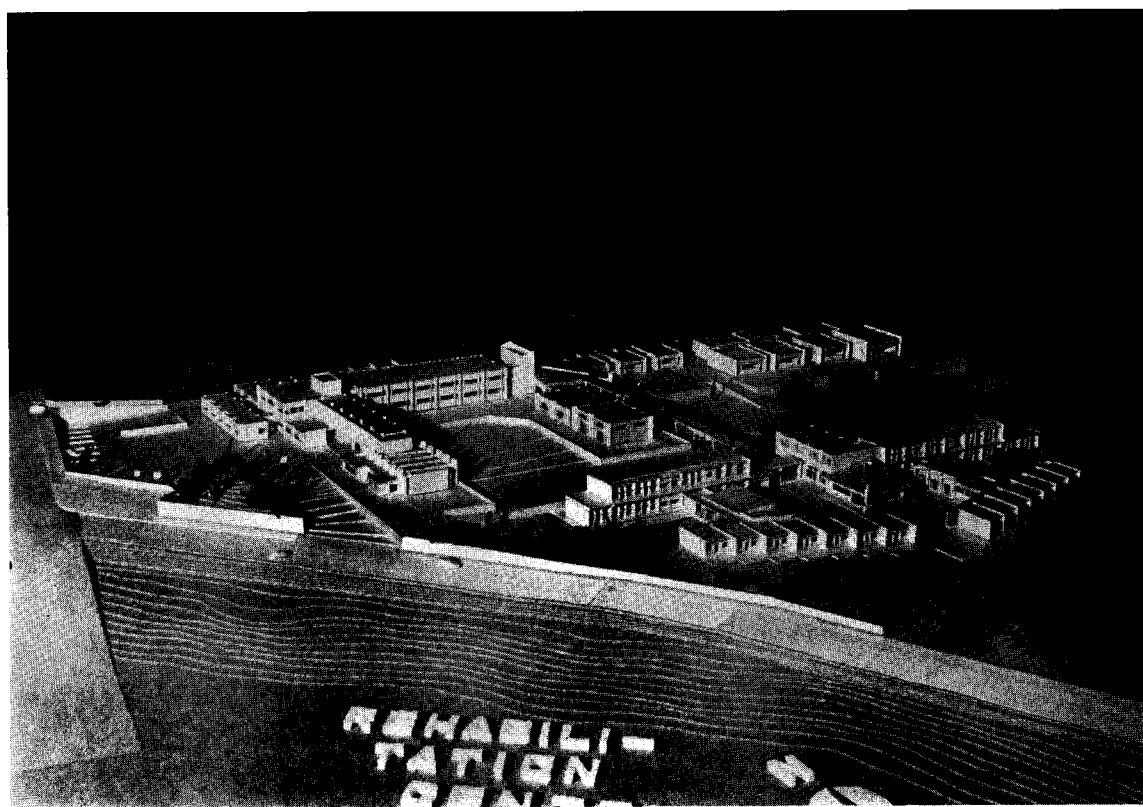
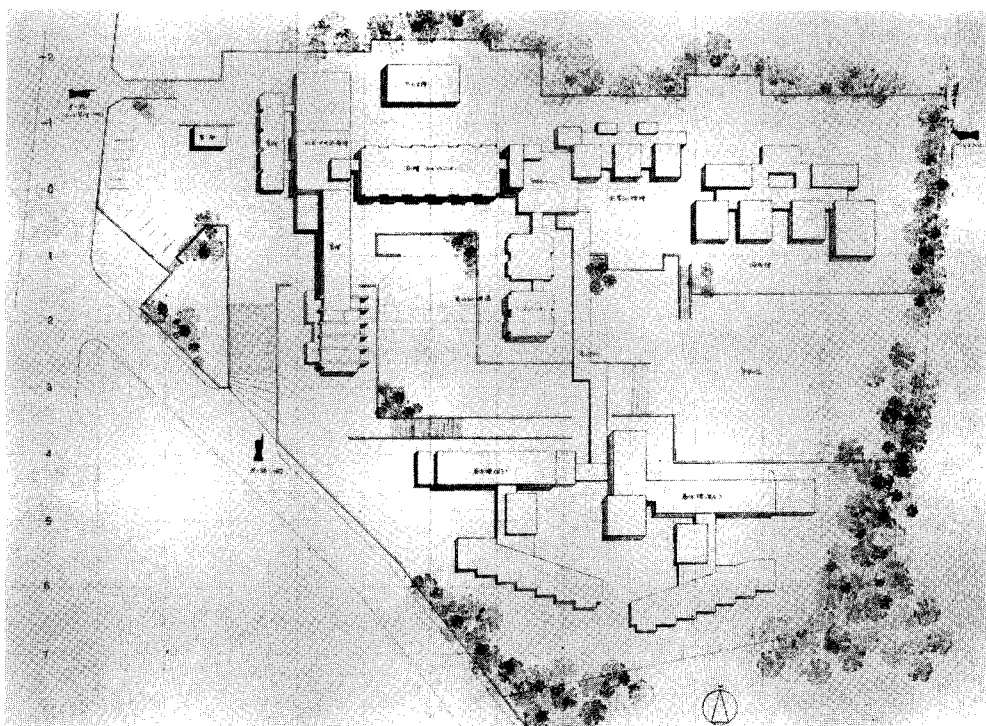
野口重男（中野組積算課 "）

馬場章夫（田口建築設計事務所 "）

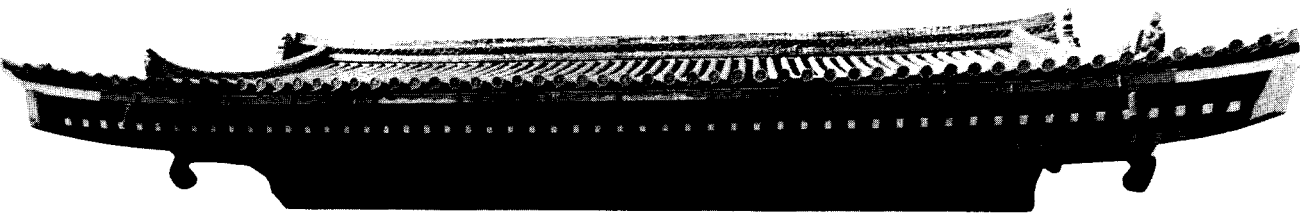
尚、田口建築設計事務所の小野氏に御協力を戴いたことを記し謝意を表する次第である。



配置図

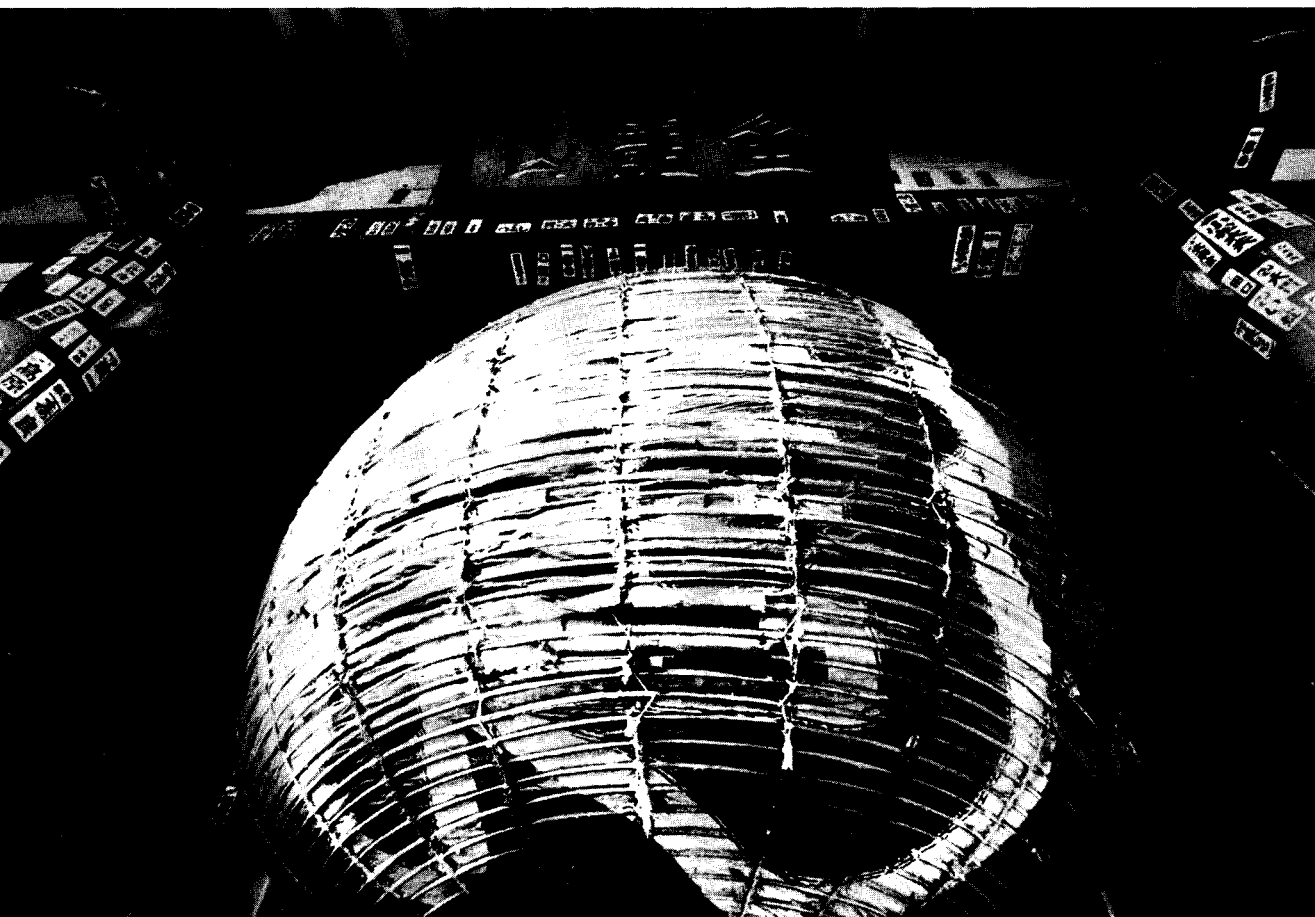


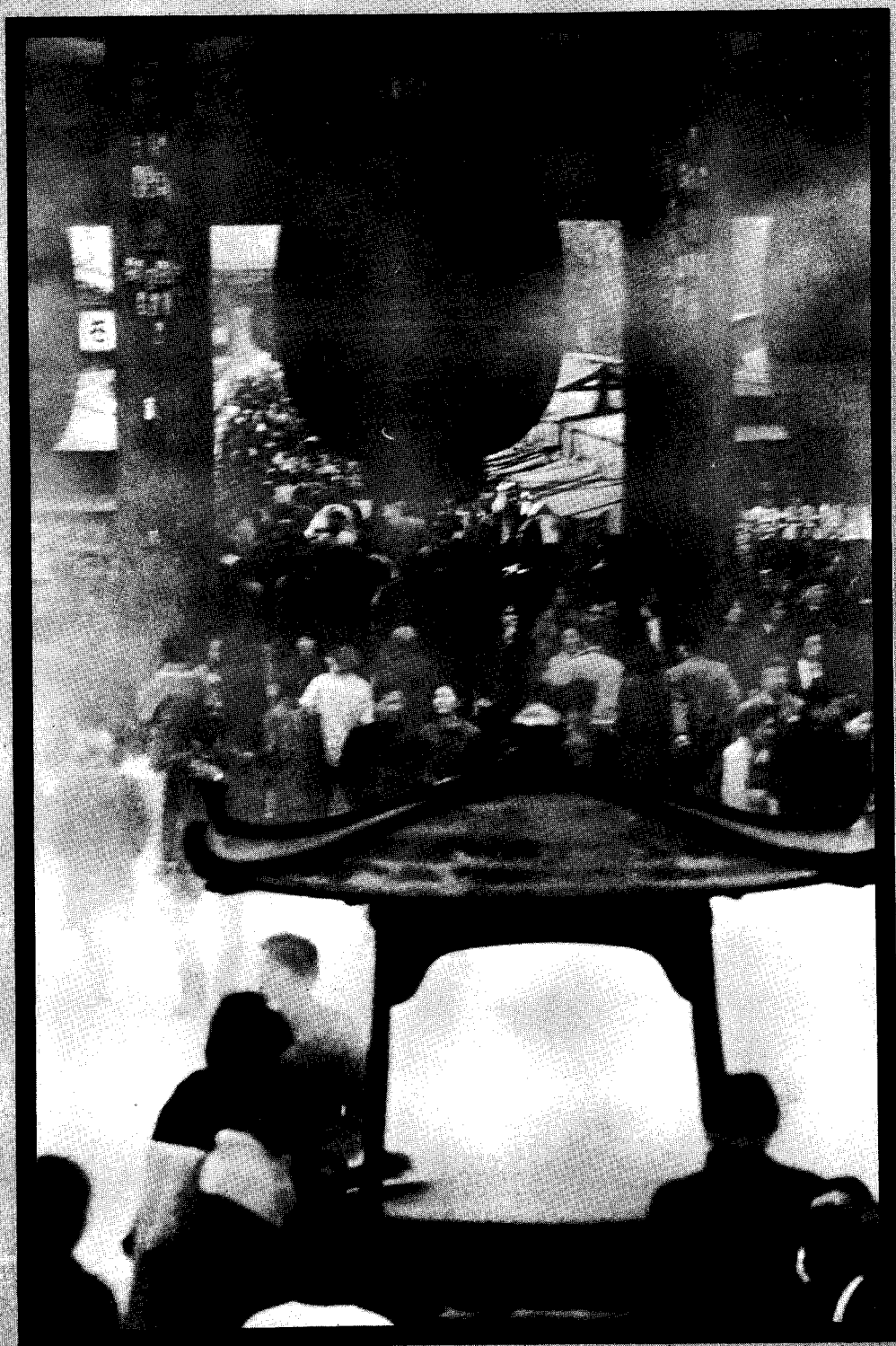
コンペ案模型写真

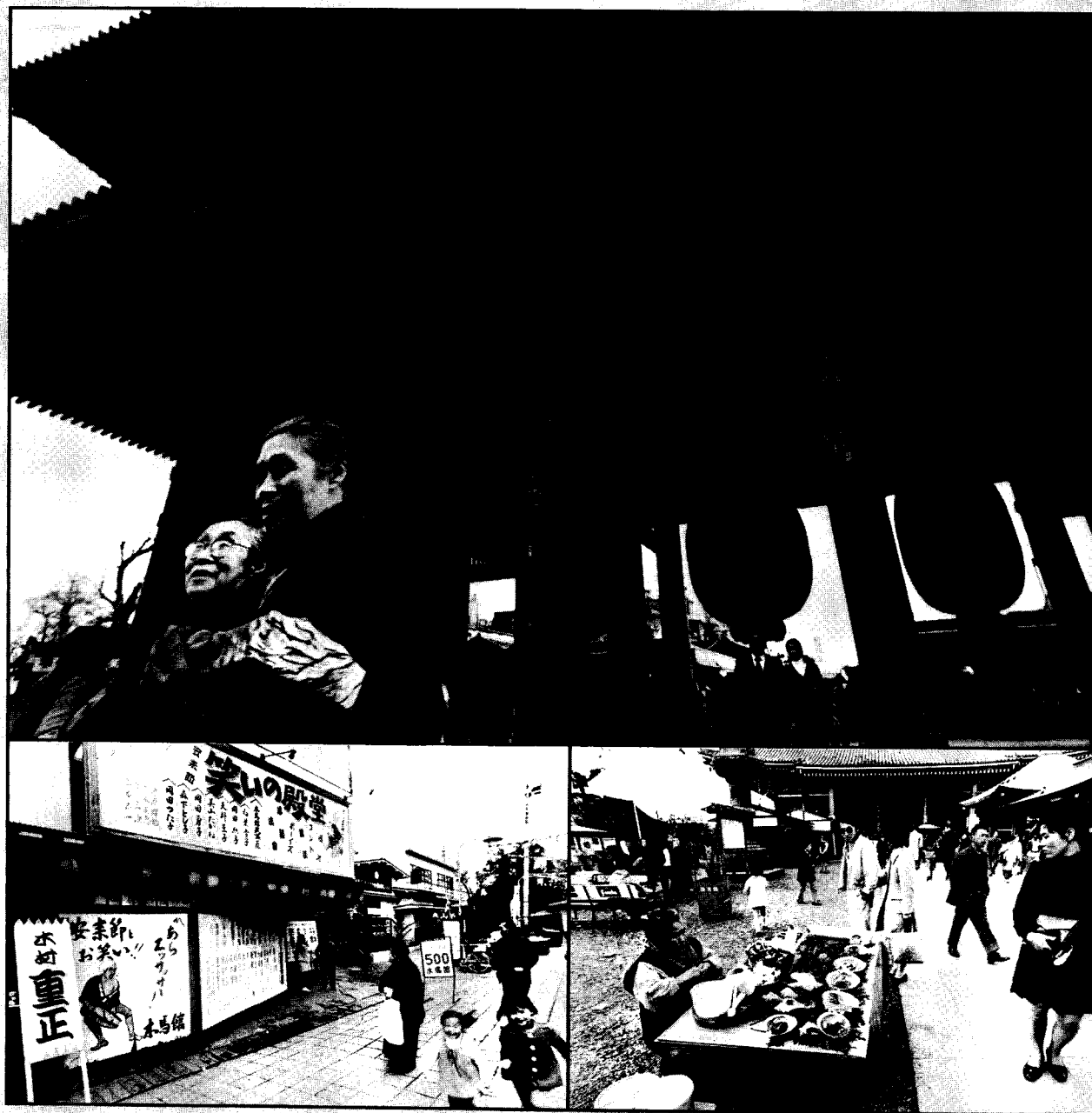


シリーズ《都市》2

浅 草



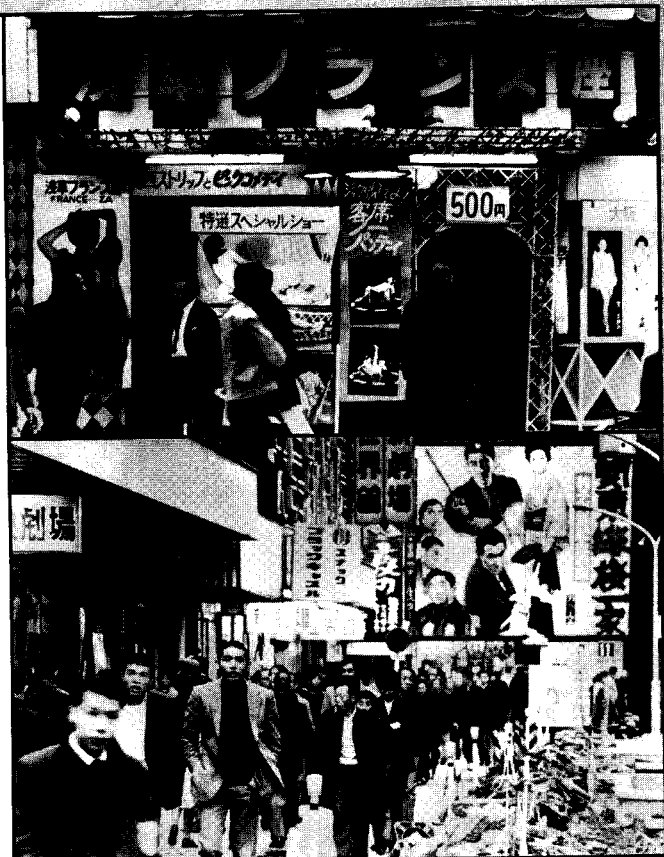
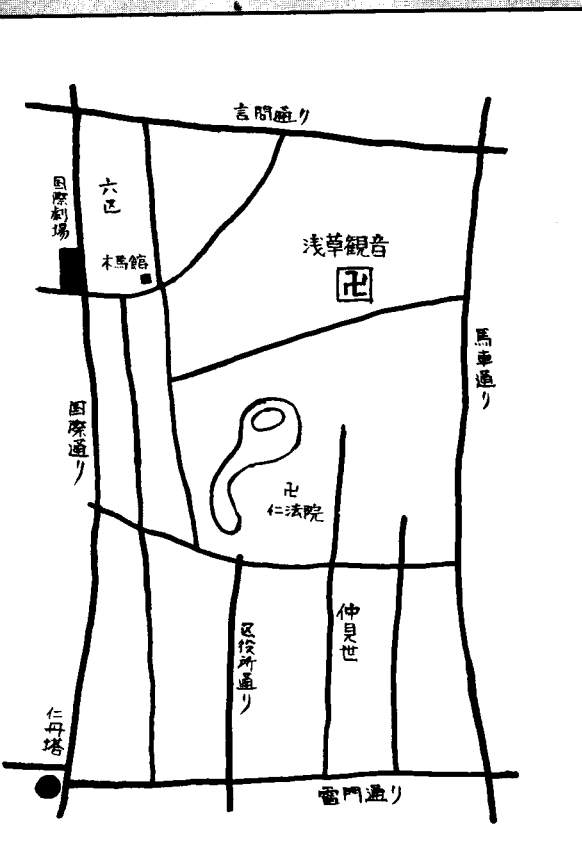




浅草というところは、まったく不思議な町である。骨董品の市かとも思える雑多な日用品が並ぶ天幕の露店、易断や人相見に集う人々で溢れ、ガサ市、羽子板市にかぎらず毎日が祭りのようなものだ。そして、お上りさんもGパンや着流し姿の若者も、草履に半てんのいなせなおじいさんも、全てがこの町によく似合う。それでいて、誰が計画したわけ

もないのに、都市の形態を有しているのだから、まさに浮遊する〈感覚都市〉の言葉がびったりくる。

この浅草が、いま生まれ変わろうとしている。それも西欧的ないかにもデザインされた人工都市として……。新世界や木馬館などの古いものが壊されていくのを憾むわけではなく、一緒にふんぶんとした人間臭までが失



われるのが、なんとも悲しい。浅草をこよなく愛した文豪永井荷風が、地下で安眠出来るようにと願うばかりである。

※ ※

——ぼくが浅草の観音さまが好きなのは、あそこに行って、ハトの豆売場にあるベンチに腰かけられることだな。あのベンチにすわっていると、パリのノートル・ダム寺院の庭の

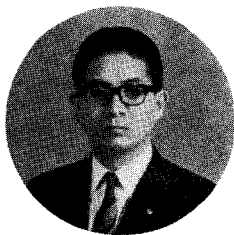
ベンチにすわっているような気がしてくるもの。ノートル・ダムからはセヌ川が見えても、観音さまからは隅田川は見えないが、もとはよくボンボン蒸気船の音がきこえましたぜ。パリでも東京でも大川のそばに大伽藍が建っているのは頼もしいじゃありませんか。

——

イ ラ ク 見 聞 記

藤井正伸

(設備41年卒)



■はじめに

この10年私が手掛けていたスリップフォーム工法による工事を行なうため1970年1月から3月までの約3ヵ月イラク国バスラに出張した。以下この間、寝起したバスラ市を中心に見聞した現代のイラクと数日旅した古代イラクの遺跡について断片的ではあるが紹介しよう。昨今、海外に出張する人は多いが中近東には数少いのでこの小文が何らかの役に立てば幸いである。

■地理的位置と気候

現在のイラクは中近東諸国の中でも日本とはあまり馴染みのない国である。しかしチグリス、ユーフラテス河が領土の中央を南北に流れ、バグダッドを首都とする国と言えばお解り頂けるであろう。ヨーロッパが厚い水で閉ざされていた氷河期のころ、この辺一帯はエデンの楽園であり、ノアの洪水があったのも、たぶんこのあたりだと言われている。

現在のこのイラクは、リワと呼ばれる14の行政単位に分かれているが地理的には4つの地域に大別される。第一は中、南部平野の灌漑地帯、第二は上流の渓谷地帯、第三は

▽バビロンの遺跡



北、東部山岳、山麓地帯、第四は西部から南部にまたがる砂漠地帯である。(国土の半分は砂漠である) 気候は全国的に夏が長く、暑く、かつ乾燥しており、冬は短かく雨期となる。それ故に地中海性と大陸性を兼ねた気候と言えるが世界でも最もきびしい酷熱地帯の一つである。ちなみに夏の最盛期には 50°C 以上の気温になる。もし、湿度が低い(15%以下)と言うことがなければ人の住める所ではない。居住したバサ市はバグダッド、モスルに次ぐイラク第3の都市でペルシャ湾から120km シャットアルアラブ川(チグリス、ユーフラテスが合流した川)をさかのぼった所にある港町である。街の歴史は古く636年に建設され数世紀の間、イスラム文化の一中心地をなしたこともあるが現在人口は20万前後といわれている。緯度的には日本の屋久島あたりに相当する。

■イラクの国情

イラクの総人口は国境を越えて移動するジプシーの数を把握しえないこともあり、はっきりしないが800万人前後と言われている。構成民族は単一ではなく、全人口の75%程度がアラブ人でアラビア語を使い、これがイラクの公用

語となっている。宗教はイスラム教で、このため日曜日は休みではなく金曜日が休みとされており、一日の生活は早朝の薄暗い空に響く異様なコーランの読経によってはじまる。彼らの生活は宗教に密着しており工事現場の昼休みにおいてすらアラーの神にお祈りをする姿を見ることが出来る。変っているのは一般に回教国ではアルコールを禁じているのにこの国には、ビールがあることである。女性の地位は日本よりはるかに低いらしく、宿舎のボーイによると花嫁はお金で買うと言った感覚である。しかし、顔まで黒いベールをかけた女性は現代では少く略式と言うのかベールはかぶっているが顔を出している人の方が多い。さらにバグダッド当りではミニスカートの女性も見られる。春をひさぐことは厳しく、うかつには出来ないがそれはまたそれで万国共通の裏通りがあるようだ。政治的にはソ連に組みしており、飛行機、戦車をはじめとする兵器はソ連製のものである。また空港、港湾、官公庁の建物、施設それに女性など写真を撮ることは禁止されている。さらに橋や主要道路の要所、要所には武装した軍隊が常駐しており汽車の中でも検閲しにくる。平和な平和な国、日本ではとても感じられないムードである。軍内部の抗争もたえずクーデタ

バサ市のモスクとバザールの一部▷



工事現場の掲示物▷



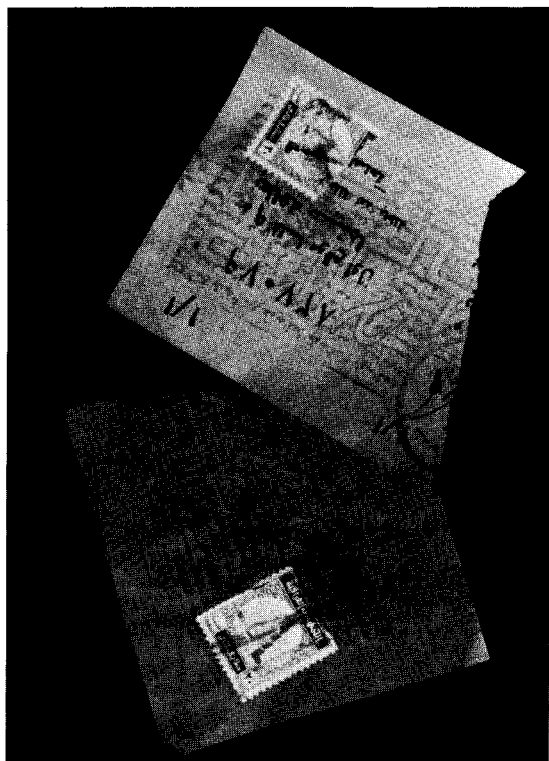
ーに近い事は年中行事に近いらしく滞在中にもバグダッドでクーデターの失敗さわぎがあったが長くこの地に駐在している人はあまり気にしないようである。その他、北部クルークのクルド族は今でもイラク中央政府の言う事を聞かず、しばしば武力衝突をしている。彼らは石油の利権を押えており財力があるので、なかなか強く中央政府の武力では押え切れないようだ。私が帰国の手続を申請した時、丁度中央政府とクルド族との休戦協定が成立したとかで3日間の祝日が公布され足止めを喰った次第である。この他にも何やら分らない休日がやたらに多い国である。

■バスラでの生活

郷に入れば郷に従えで金曜日は一応、休みである。バスラの街に出ると映画館が4つばかり有りヨーロッパものが多く上映されているが極くまれに日本のフィルムが来ることもあるそうだ。どの映画館も総入替制を採用しており勝手な時に入れなしし座席指定である。話の種に映画館に入ろうと思ったがポスターの絵より他はさっぱり分らない。入場券を買う窓口の上に書いてある説明を見ても何が何時からはじまり、いくらなのか見当がつかない。数字の1. 2. 3. ……はアラビア数字で何処でも同じだと思っていた

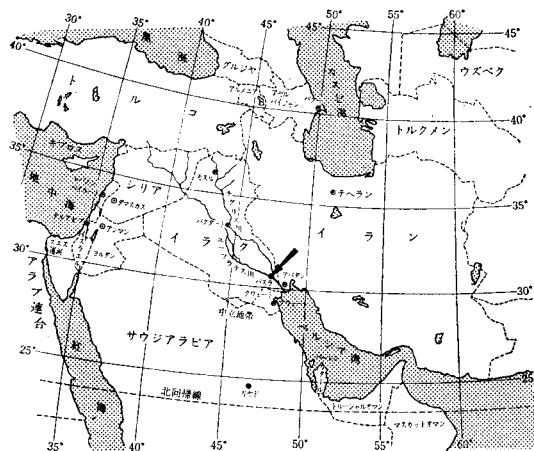
ら大間違い。仕方がないので他の映画館に廻って見ると、first class と書いてある窓口があった。英語に弱い私ではあるがアラビックよりましだ。ほっとした思いで手まねで席を指定し入場券を買う。中に入ってきょろきょろしているとコーラの売子が席を教えて呉れた。(何しろ、図に示すような券である座席番号を探すにも大変だ)お客は一杯で時々奇声をあげて喜んでいる。館内の仕上も客も、まさに日本の場末のそれと同じ雰囲気である。

東京を発つとき散髪はして来たが、2ヵ月も3ヵ月もほっておくわけにも行かない。それにどう言う訳か散髪屋と靴屋は小ざれいな店が多い。そこで散髪に出かけた。店に入って順番を待つ間にチャイと称する日本の紅茶に似た飲み物を小さなガラスのカップに入れて出して呉れる。お互に言葉はよく分らないが二言三言の単語で目的は達する。相手が本来英語を話す国民でないから、こちらも気楽である。この店には3回行って馴染みになったが帰国前に行って写真を撮らせて呉れと言ったら心よくポーズをとって呉れた。何処の国でも市民どうしでは気軽につき合えるものらしい。



◁映画館の入場券

▽中近東地図



■イラクの遺跡

(イラク博物館) バグダットに行く事があったら、是非イラク博物館をおとずれられるといい。単にバビロン帝国が栄えた古代文明発祥の地であると言うだけでなく、もろもろの民族がこのメソポタミアの地に繰りひろげた興亡の歴史を強烈に教えて呉れるであろう。その中に納められている遺物には、ネアンデルタールの完全な骨格、楔形文字をはじめて用いたと言われるシュメール人の遺物、それに次ぐ、バビロン、アッシリア、ササン朝ペルシャの大帝国の遺物、イスラムの教典コーラン等とがある。なかでもアッシリア文明の遺物は量においても内容においても実に素晴らしい。そうした中で東洋の国、イラクを感じさせる古い土器や土人形を見た。それらの出土品は日本の古墳から発掘されたものと、そっくりのものである。おどろきと共に言いたいような感動をおぼえた。

(ウルの遺跡) 現在のウルはナシリヤから、かなり奥に入った砂漠の中にぽつんとあるが、その昔はペルシヤ湾(現地人はアラビア湾と呼ぶ)の波がこの近くまで打ち寄せていたと言う。バビロニア以前、この地に居住したシュメール人の都市遺跡で旧約聖書にもカルデアのウルという名が見られるそうだ。アーチ架構の原形と考えられる迫り持ち

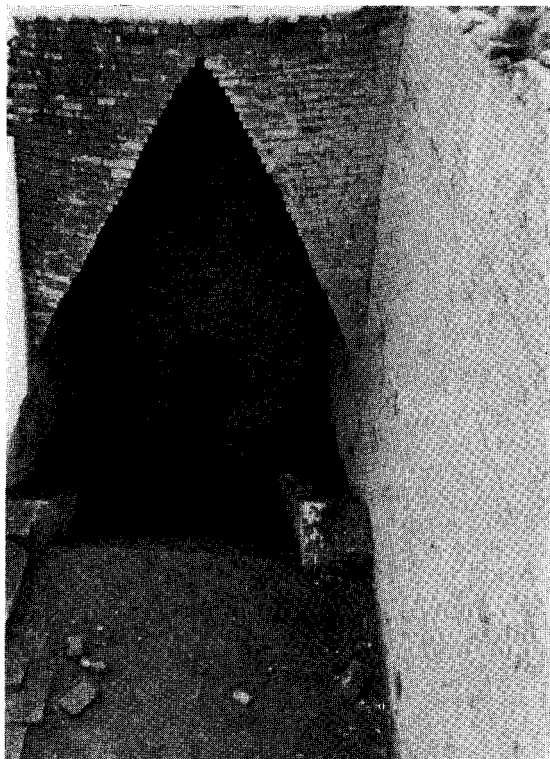
の出入口が王様の墓跡で見られる。この墓跡のレンガにも楔形文字が所々に刻まれている。

また未発掘の遺跡が近くかなりの規模であるようだが現在は発掘しても良い遺物はイラク政府に没収されるので誰れも行わないそうである。(昔は発掘した者の所有とされていた)

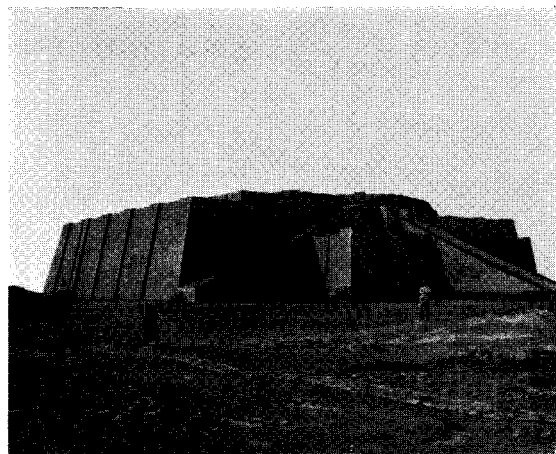
(バビロンの遺跡) 世界の七不思議の一つ、空中庭園があったと言われるバビロニア王朝の都、バビロンの遺跡をたずねた。話には聞いていたが路材としてアスファルトが使用されており、少し変色はしているようだが今なお残っているのにはいささかおどろきである。それにレンガによる完全なアーチ架構、城壁に施された、いろいろな動物の浮彫、ただ単に大規模な築構をしたと言うのではなく、その細部についても現代に通じる立派なものである。私達の技術はこの数千年の間にどれだけ進歩したのだろう。

(サマーラの遺跡) バグダットの北方約 130km チグリス川の東岸に 836~92 年までアッバース朝の第 8 代のカリフの都であったサマーラの遺跡がある。ほら貝状のミナレットはモスクだと言われている。隣接してあった宮殿は、現在周壁の一部しか残っていない。おとずれた時、あいにく小雨が降っていたが、この塔の上から神のお告げを説く姿を

墓室への入口▷



▽ウルの遺跡



想像すると、その神秘性に古代の人々が曳きつけられずにはいらなかったであろう事が分る気がする。

（クテシフォンの遺跡）パルティアおよびササン朝ペルシャ帝国の首都であった所で先のサマールとは逆方向、バグダッドの南方約40kmのところにある。大帝国の首都としての偉容は7世紀の中頃アラビア人が侵入した時に完全に破壊されたが後に造ったといわれる宮殿の一部が残存している。ササン朝の代表的な建物と言われているがレンガのみでこれほどの巨大な空間を造り出した技術に感心するほかはない。この遺構に接して公園が設けられており、ほどよい陽ざしの日であったせいか一般市民が多勢そこ処にたむろしていた。バグダッドに近いせいかバスラよりかなりモダンな服装をした人が目につく。

■おわりに

遺跡の発掘、そこから発見された数々の出土品、今まで、日本とは関係のないアラジンや魔法のじゅうたんの物語の国としか思わなかった中東の国々と何千年の古代にお

いて、すでに相当の交渉があり多くの影響を受けていたことを肌を感じる。それと同時に日本では感じられない、まさに生死をかけた民族の興亡、単一民族でない多民族による国家、今なお定めなき流浪の生活を送るジブシー。

有史以来、他民族によって征服されることもなく、ほぼ同一民族によって成立して来たこの日の本の国は、意味は違え、極東に浮ぶ黄金の島ではなからうか。イラクの現代と古代を見聞し歴史の流れの厳しさをひしひしと感じた。



▽サマールの遺跡



△バビロンの遺跡
城壁の浮影



▽クテシフォンの遺跡



ルドルフ・シュタイナー



南口恒夫

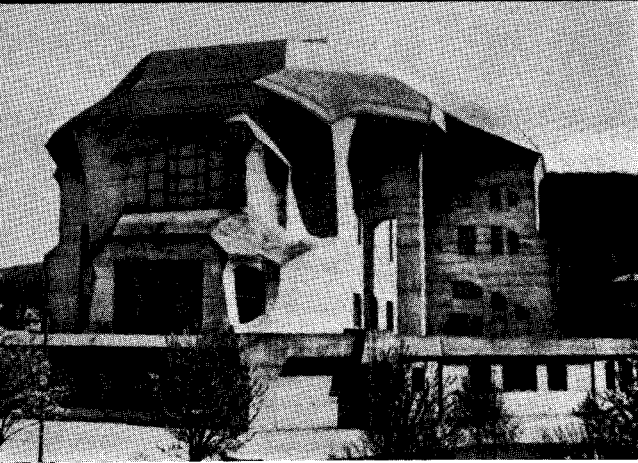
(建築40年卒)

私は、この稿で数々訪れたヨーロッパ建築の中で、特に感激を受けたルドルフ・シュタイナー (Rudolf Steiner) のゲーテアヌム (Geotheanum) について語りたい。一つには、多くの人々に未だ知られていないようにと思われるゆえに、一つには「真の建築」「建築の行為」を語っているがゆえでもある。

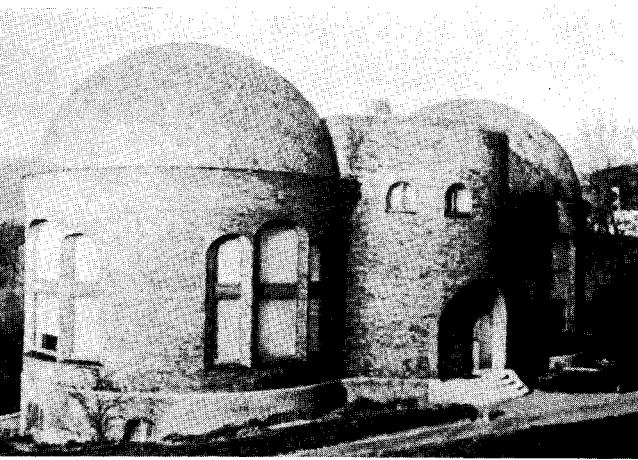
11月上旬の冷たい小雨の降り続く頃 Swiss の Basel 市西北に位置する、Geotheanum を訪れた。Basel より古い市電にゆられて、30分程の距離に Dornach の町があり、ここより木の葉が雨に打たれ黄色く点在する静かな住宅地の坂道を20分程歩くと木々の梢を通して緑の丘の上にその偉容を現わす。雨に煙って遠望はきかぬが、晴れているならば、遠く美しい景色が望まれる場所に位置している。

この地に1913年、ルドルフ・シュタイナーは、最初のゲーテアヌムを建て始め9月20日に定礎式をしている。途中第一次大戦により工事が遅れ10年後の1922年に落成したのであるが、落成式のクリスマス期間中講堂で国際的精神科学の会合を開催していた30日夜、火災で焼失してしまった。第1次ゲーテアヌムは大小2つの交又する球状ドームを持つ木造建築でシュタイナーにとって最初の建築活動の作品であった。直ちにシュタイナーは第2次ゲーテアヌムを鉄筋コンクリートで設計し1924年工事に着手し1928年、今日現存するゲーテアヌムの完成をみたのであるが、その間、1924年3月30日シュタイナーは過労のため、現場の側にある質素な自分のアトリエで逝去したのである。マリー夫人は悲しみにありながら、シュタイナーの同志の者達と彼の遺業を継続し、遂に造り上げたのである。建築家ルドルフ・シュタイナーの業績について多くの人々に知られていない理由として、第1次ゲーテアヌムと第2次ゲーテアヌムのみが生涯中唯一の作品にすぎなかったからである。又、1925年グロピウスによって起こされたデッソウのパウハウスの芸術運動の影にかくされてしまったことと当時の職能的建築界とあまりにもかけ離れたゲーテアヌムは非難と嘲笑の中に忘れ去られてしまったのである。

そして第1次世界大戦、関東大震災、第2次世界大戦と激動の政代を経てきたわが国の戦後の建築界にとって住宅供給が目の前の問題であったことを思えば当然のことといえる。シュタイナーの死より半世紀たった今日なお時代を超えて話かけてくる彼の理念を内に秘めた力強いゲーテアヌムの価値と本質についてふれてみたい。尚現在私の手元にルドルフ・シュタイナーに関する資料が欠けている為近代建築(1964年5月号)に今井兼次先生が掲載された「シュタイナーのその人について」と年末に焼失した最初のゲー



第2次ゲーテアスム



第1次ゲーテアスム

第2次ゲーテアスム配置図



テアスムの建設中の現場小屋で協力者にレクチャーしたノート「レクチャーのためのノート」と「言葉としての建築」をそっくりここに掲げることによって、彼の人と彼の建築製作態度に潜む内的精神と建築の生命感を読みとっていただきたい。

■シュタイナーその人について

ゲーテアスムの建築について語る前に、シュタイナーという建築家がどういう人であったかということを一応簡単に話して見たいと思う。ルドルフ・シュタイナーは1861年ハンガリー国境に近いオーストラリアのクラリエベック Kraljevec という村の駅長の息子として生まれた。少年シュタイナーがその郷土の自然環境にどれほど大きい影響を受けたかわからない。その広大な環境は、美しさとさびしさに満ちており、牧場と森のはずれから、雪をいただくアルプスの峻峰を眺めながら、日々簡素で善意に満ちた農夫と交わり、四季を通じて変わりゆく自然のいづきに深く浸ることが出来たのである。

このような環境のもとにあってシュタイナーは、小さい時から強固な意志とするどい内的感受性とを自分の心の中に芽ばえさせ、育てられていった。彼の父親は、息子を鉄道技師にするつもりで、ウィナーの工業学校に入れたが、かれが自然科学に興味を持ち始めたのはその頃からである。また、彼が14才の頃に哲学にも関心を持ち始め、精神的世界の問題に心を向けるようになった。

やがて18才の年、1879年、ウィナーの工科大学に入学し、そこで彼は自分の専門の学科の他にも、生物学、化学、物理学などの研究に入り、特に物理学は彼の関心の的であって、後日彼が提唱した人智学の発展に大きい影響を与えることとなる。また光学、植物学、解剖学などについても広く研究に心を注いだ。この大学生活中シュタイナーは、詩を通じてゲーテのものの考え方の中で深く精神的世界に関するいろいろの事柄に感銘したのである。

その後1890年に彼は、更にゲーテの精神を導き出そうとしてゲーテの都であるドイツのワイマールにおもむき、目に見えない自然、即ち精神科学の探究にその身をささげたのである。

ワイマールで過ごした5年後、彼は深く感ずるところがあって「沈黙」の世界へと向かったのである。これはちょうど、彼がワイマールからベルリンに移った時期であって、やがてシュタイナーの思想がここで精神世界とのいっそう深い出会いの場となってくるのである。

このような経過の中にあって、哲学、文学などの教養を

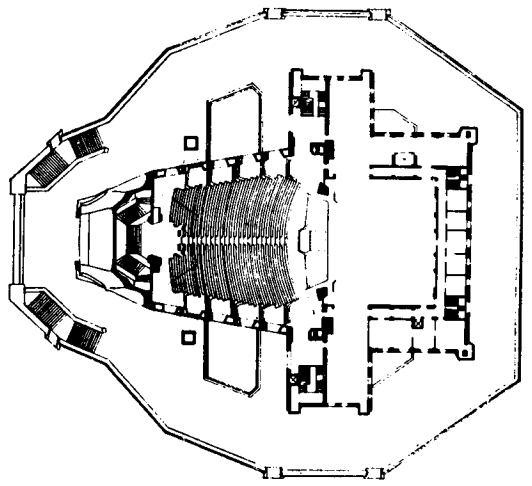
身につけ、時代の諸問題に苦悩する彼の感受性と科学的知識と、そして彼のずばぬけた芸術的感性とその総合とが芽ばえ始め、シュタイナーを有能な建築家になさしめる準備の機会となったのである。また彼が少年時代のころから、宗教的環境の中に育ったことも忘れるわけにはゆかない。少年シュタイナーは、村のカトリック教会で、他の少年達と共にミサ答えをつとめていたことなどもあったので、彼の体内には深い宗教的精神が育てられていたことが推察されるのである。

1902年から1909年の7年間は、シュタイナーが創設した人智協会の揺籃期であって、このころから精神科学活動の講演を絶えず続けていったのである。その範囲は北欧を初めとして、イギリス、オランダなど、殆んどヨーロッパの全域に及んでいる。

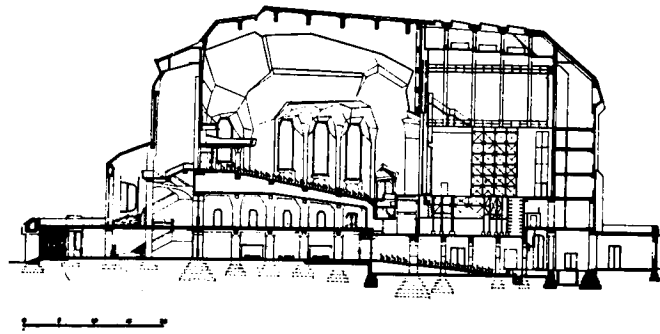
1913年、シュタイナーは彼が提唱し続けた人智学社会を総合的に展開しようと決意して、スイス・ドルナッハに彼の同志達と協力して、ゲーテアスムの建設に着手したのであった。その建設期間中、第一次世界大戦がぼつ発し、その4年間というものは手近い国境から砲声のとどろくのを現場の槌音の中に聞きながら、シュタイナーはひたすら平和をもたらすことを乞い願ったのである。

■レクチャーのためのノート

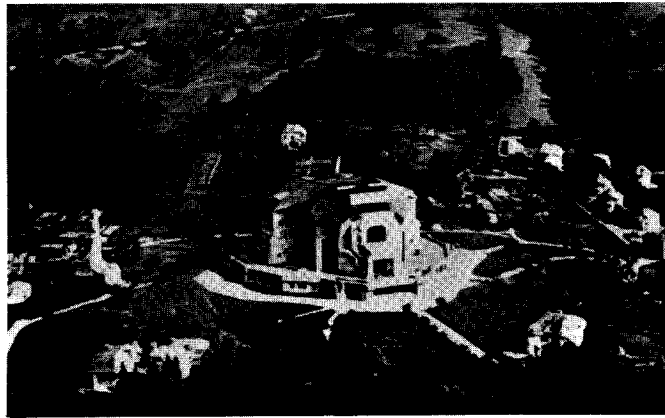
「此の建物が完成されたあかつきには、特に専門家的な観点から多くの非難がなされ、この建物は実用的でないとか、或は素人臭いとか云われることを十分覚悟しなければなりません。こんなことは我々の気持ちを少しも迷わせるものではありません。というのは何か新しいものが世間に発表される場合には、専門家のそれに対する批評というもの、は、大抵は正しくないのが現実の姿だからです。しかしわれわれは、もしもわれわれの責任感を慰めるために『現代では根本的に云って、芸術の発生、芸術の個々の形式やモチーフの発生が専門家の立場からは全く誤解されているのだ』などという考え方をしたとしても、その場合には芸術的欲求に対して現われてくる悪評によって我々は憂うつになることはないでしょう。そして現在芸術観として色々な形で勢力をもっているものによってではなく、われわれが望んでいるものによって、我々が芸術の発生に精神的なまなざしを向ける時に現れて来るあの芸術的欲求の根源的な力に接近することが出来るのだ、ということを次第に理解するようになるでしょう。人類の発展史の中で、一体、芸術観とは何を意味しているのかを世間の人々は殆んど理解してはおりません。従って、芸術の根源的欲求、芸術の発



第2次ゲーテアスム平面図



断面図



第2次ゲーテアスム全景

生の或る部分と一致しようとしているわれわれの建物の如きものが、現代の方向、現代の傾向を擁護している人々によって、必ずしも好意的に受けとられないとしても、少しも不思議ではない……。」

「出来上ってくるべき諸形態を生活の中に於て 実際に同感し、現今芸術と呼ばれるものの多くに縛られないようにして下さい。そうすればそのとき、恐らくは、それが何か実りあるものとして、われわれに生じて来るのです。そうすれば、われわれは新たな意味に於て『これが芸術である』と識ようになるのです。そうしてこれは芸術の成立にあたっては人の本質の深みから生み出されたものにほかなりません。またこれは我々の時代にあつては、誤解される可能性を持つものであります。」

第一講 AKANSAS 「葉あざみ」より

「皆さん！ 建築物のために硝子窓をしつらえることを、先ずさしあつての目的としているこの建物の中に、自分らが居ることを思う時『われわれがこの建物に対して果すべきことに対して、実にわれわれの人間的能力を以ってしても、われわれに可能なるものを以ってしても、やはり、われわれは如何に太刀打ちが出来ないことか』と云う考えに、われわれは動かされざるを得ません。そして、この太刀打ちが出来ぬと云う感情を、われわれが仕事の全課程を通じて持ち続けるならば、それは、良い動力のある感情であると思います。何故なら、ただそうしてのみわばわれわれの可能な最高なるものを達成し得ることが出来るのですから。『われわれはやはり真の課題に、実際 正しく 太刀打ち出来ないのだ』という感情を、われわれがまさに常に持っていれば、われわれの時代にあつて、又われわれの手だてを以って可能なやり方で、精神科学の仕事の、芸術的建築の開始を、完成に到らしめることが出来るのです。われわれの建物に足を踏み入れる時、到る所で注ぎかかるその独自の作用力によって、いわば、自分が、完全に包まれてしまったかのような気持ちをわれわれは抱きます。『汝の力、汝の能力が達し得る汝の可能性の全てを果せ、汝は果せられねばならぬことに対して、十分には尽し得ないのであるから。そして汝がその可能な一切を尽しても、まだ十分であるには程遠い』を云う気持ちに、われわれは包まれてしまうのです。」

『皆さん、われわれが考えることができるのは自分にまさしく手近かのことです。例えば、私が考えているのは、現在、才ある建築学的な力によって建てられている幾つか

の建物です。それが、いかなる新しい様式も生み出さず、新しい精神の息吹に貫かれていないにも拘らず、才ある建築学的創造物であるようなものもあります。ところがこれら全ては共通な特徴づけを持っています。即ちそれらの建築を眺めて、外部から嘆賞することが出来る。その中へ足を踏み入れることが出来る。そこへ入って行き内部から美しいと嘆賞することが出来る。しかしながら、われわれは自分が感覚器官に取り囲まれているのを感じないように、そのように、これらの建物の中で自分を感じることにはないのです。何故、そのように感じることにはないのでしょうか？ その中でわれわれがそのように感じることがないのは、その建物が沈黙しているからです。』私は 皆さんに 今晚、この考えをはっきり申し述べたいのです。……」

■言葉としての建築

『皆さん、今晚皆さんに芸術的なものについていろいろと理解していただくこと、ただこれだけが私に肝要であるにとどまりません。むしろ私に重要なのは、今晚、私の心の中から出て来るものを皆さんの心の中に移し入れてしまいたいということです。私が願う感情、即ち、われわれの建築物がなるべきところのもの、これに捧げる仕事の神聖さによって内的にうち抜かれているところの感情、まさにこの感情をもって皆さんを滲し、この感情を皆さんの生きた心に染みこませたいのです。皆さん、われわれはこの仕事場を言葉によってより一そうよい手段で清めるのです。われわれは、今やまたこの門を去るのでありますが、仕事場というものは、われわれの心の全心を集中せしめ、人間世界、精神世界への愛に向かわしめるものであるからなのです。この場所で作られるところのものによって、精神への道が見出されるようにと、われわれの全力を集中せしめるものなのです。もし人間が愛のうちにその精神を見出すなら、この精神から、地上全体に於ける平和と調和とが招束されることになるのです。そうして今晚ここでお話しして来たことを通じて私が引き出したいと願ったこの精神によって、もしも一切が生命を吹きこまれるものとすれば、この丘の上に於てこの愛の精神をもって——これはやはり真の芸術家気質の精神であります——作られる一切のものがこの精神によって充されるものとすれば、そうすればその時、この丘から、この丘を覆っているところのものから、地球全体に、平和の精神が放たれるでありましょう。調和の精神が、愛の精神が地球全体に発せられることでありましょう。またその時にはかかる地上の精神的平和の中心、かかる地上の精神的調和の中心、かかる地上の精神的

愛の中心、これらの多くが世界に栄えるように、この丘の上でなされるものの後継者が見出される可能性が生まれてくることでありましょう。このような平和の、調和のまた愛の精神を持つがために、われわれの建築物の生命性をしっかり確保しようではありませんか。この建物がまるで生存者の精神から生きたものとして生じて来るもの自体の如くに、われわれにみえてくるように、また、建物が存在し、その家が諸精神を求める公衆の家である時、これが精神のための言語器官となり精神への道しるべとなるように、まさに建物がこのようなものとなるがために、われわれは建物の生命性を確保しようではありませんか。』ギリシャ神殿の中では神が住まっていました。浪漫主義の建築物、ゴシック式の建築物の中では公衆がその神と共に住まうことが出来ます。しかし、未来の建築物を通しては精神世界が語るはずなのです。地上の諸力の家、地上の諸形態の家、これが人類の発展を越えていくのをわれわれはみてきました。人間の魂と精神性なるものの魂との結合である家が、地上の精神的発展を越えていくのをわれわれはみて来ました。『言葉の家、語りかける家、皆さん、この家を真なる芸術への愛をもって、真なる精神性への愛をもって、また同時にあらゆる人間への愛を以って建てようではありませんか！』

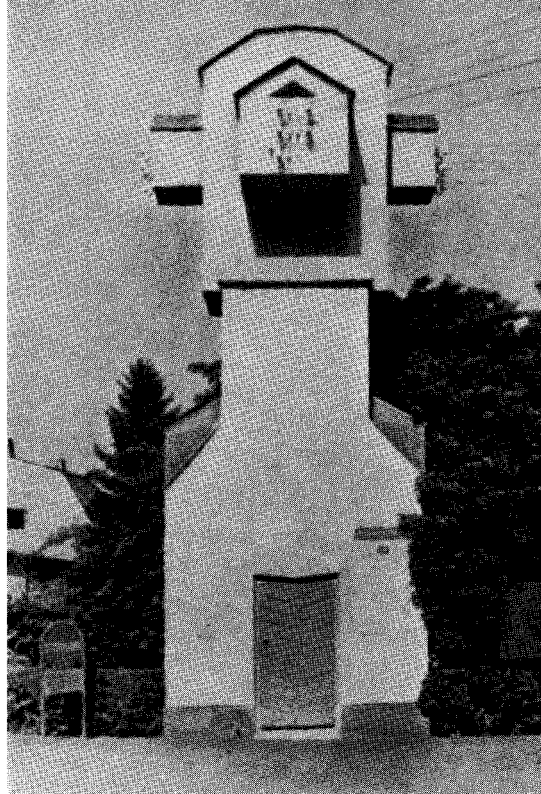
第二講「言葉の家」1914年6月17日ドルナッハにて（芸術家の仕事場の清敵のために）より

■人智学社会

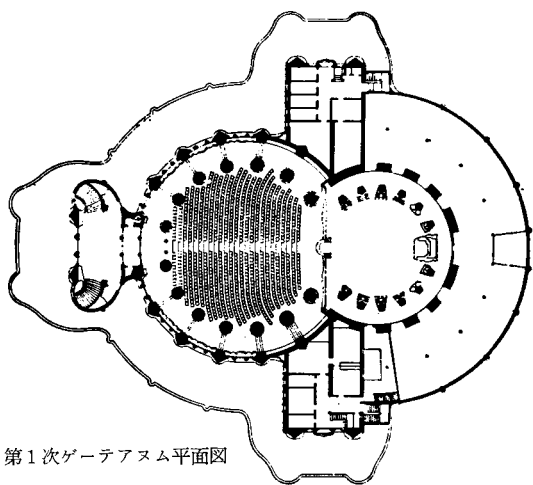
ルドルフ・シュタイナーが創設したゲーテアヌムは次のようなスローガンを掲げていることは注目すべき事柄である。「人智学社会 Anthroposophical society とは個人的にもまた社会的にも魂の生活をより深く求める人類の合致をいうのであって、精神的世界の真の知識の基盤をなしているものである」。こういう 気高い人間愛の精神を基調とする教育と、その研究機関とから出発しているのである。このゲーテアヌムは精神科学の教育研究機関である学校の他に、シュタイナーとマリー夫人との協力によって創設された神秘的ユーリズミー Eurythmy と名付ける舞踊研究機関をも含んでいて哲学、天文学、数学、薬学、農学および絵画、彫刻、工芸、音楽舞踊の芸術面にわたる教育ならびに研究をさらに大きく発展させている。

ここに集まる研究者、学生はほとんど全世界の各地から集まっており、国際的な相ぼうさえ呈しているのである。

以上のようなシュタイナーのレクチャーの断章から彼の製作態度の中に流れている彼の精神の一端を理解して下

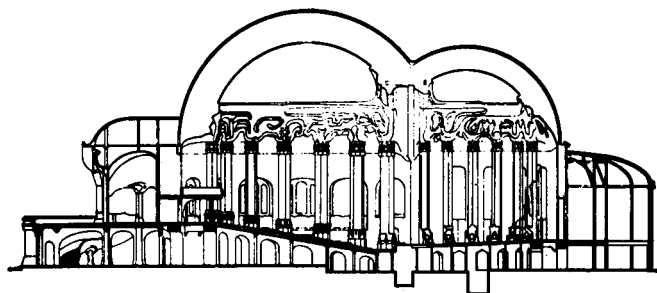


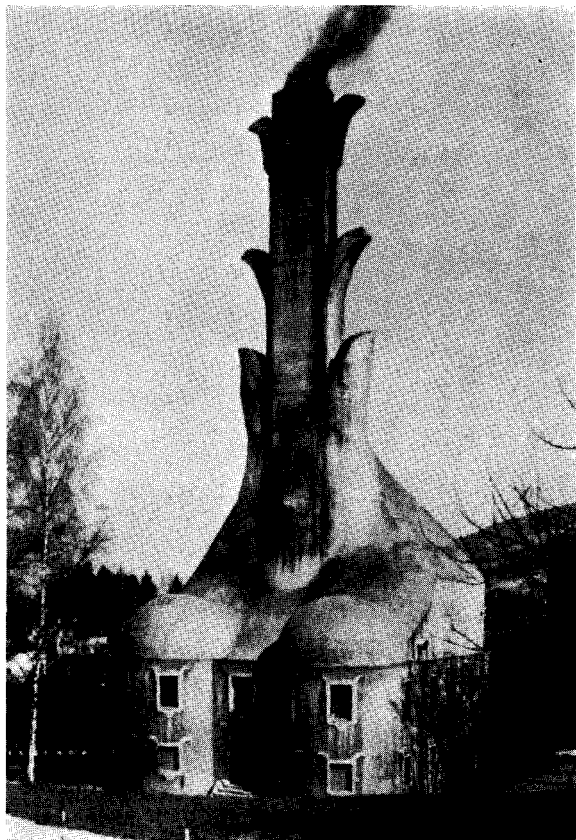
変電所



第1次ゲーテアヌム平面図

断面図





焼却炉

さい。

ゲーテアスムを訪れると親切にゲーテアスムについて、ルドルフ・シュタイナーの人について、説明し案内してくれます。設計図、スケッチ、模型、しまい込まれた第1次ゲーテアスムの焼失現場に残されたステンドグラス等を出して来て、シュタイナーへの理解を深めさせてくれます。ここに働くそして学ぶ学生全てが、シュタイナーの理念の下に集り来て、深い理解を持って彼の意志を継ぎ、人間の内に向って学び続けているのです。

■第2次ゲーテアスムの規模と内容

東西長さ97m、南北91m、主要出入口を西側に持ち2・3階部に約1,000人を収容するオーデトリウム、舞台、パ

イプオルガン、そして付属室を持っている。側西正面出入口の両サイドに2階大テラスに上る階段があり、2階ホールよりも出入できる。そしてこの大テラスからはゲーテアスムを含む美しい景色をパノラマのように眺めることが出来る。1階には、主要出入口2つと、ロビー、クローク、レクチュア・ルーム、ステージ付小講堂、展示室、書籍売店、ユーリズミー舞踊実習室、その他の読書室がある。2階には、管理事務室関係の諸室、精神科学の各室、絵画室等がある。3階にオーデトリウム、最上階にはシュタイナーの記念堂と墓が設けられている。そして、この丘を頂点として周囲に、ファン・プロメシュタインの家(1919)、変電所(1921)、ドゥルデックの家(1915)、デヤーガーの家(1921)、ユーリズミーの家3軒(1920)、ユーリズミーの増築(1924)、写真スタジオ(1914)、印刷工場(1924)、焼却場(1914)、シュールマンの家(1924)の12の建物が散在している。またゲーテアスムに接してアトリエと指物師の仕事場がある。ゲーテアスムの外観はコンクリート打放しの力強い姿で屋根はスレートの黒味がかかった色彩であるが壁面の凹凸が作り出す陰影と力強い柱と、ダイナミックな屋根、そして建築物のために、硝子窓をしつらえることを目的としている窓、全てが内的豊かさを表わして外部に表出し発展して全体を構成している。ゲーテアスムのすさまじさは造形によるものでなく人間の目で抱えられる「現実の空間」より人間内部の「霊の空間」とも呼ぶべきものを建築的実感としてデザインしているゆえ客観的に美しいと感ずるものより我々の心の深奥で共鳴する根源的なものをデザインしている。それゆえに、この建物に接する人をして息苦しくさせるのであろう。

今日の造形性に身を置く私にとって精神より発するものに出会う時、妥協を許さぬ厳しさを感ぜずにはおれないし、感動せずにはおれない。

西側正面出入口よりホールに入ると吹抜部を持つ左右に約1千人を収容するオーデトリウムに達するコンクリート打放し階段がある。この左右対称のメイン階段は残念ながら言葉不足で説明できぬ。ただ、シュタイナーの天分に驚くのみである。私はかつてこのような階段を見た覚えはないし上った事もない。打放しコンクリートの壁・柱・梁そして階段が一体となり塑造的空間を作り上げているが決して意図的、造形的塑造でなく静かに受け入れることのできる空間である。誰しもがゲーテアスムを訪れこの階段にこの空間に——ゲーテアスムの階段一つ一つに——接するだけでシュタイナーの天分と人間精神の根源から解決がなされているのを見出すでしょう。私が今なお明瞭に記憶して

いることは登るという意識なく引き込まれる感じがしたことである。この原因を探りながら3階踊場に出ると、巨大な真紅の色ガラスの窓面を通して外光が射し込み、このゲーテアスムで初めて接した強烈な色彩に驚きと美しさと、神秘なる雰囲気包まれた厚さ2cm位の真紅のガラスにダイヤモンドカッターでそいだ太陽を中心に天使が空中を飛んでいる姿が刻まれている。明りを消すと外の光を後から受けたステンドグラスは一層彩やかに薄暗い空気の中で浮び上り、ここにもシュタイナーの精神的空間の強烈さを見出した。重いオーデトリウムの木扉を押して入ると内壁の白一色の中に細長いグリーン、ブルー、パープル、ピンクの縦長の細い窓が配置されている。一つ一つが一枚ガラスでシュタイナーのモチーフが刻まれ、世界の愛・人間の愛・建築の人間化・意志の誕生・視力の獲得・人間世界の神に対する敬虔などを鉛線を使用せずに高さ4m、巾80cm、厚さ2cm程の色ガラスにシュタイナー自身がダイヤモンドカッターで刻んでいる。旅行中各地の教会のステンドグラスを見て歩いたが全てが鉛線を用い小さく彩色されたガラスを継いでいる。それだけにこれ程大きなステンドグラスに驚くと共に、鉛線のない美しさに、また神秘的にして宗教的雰囲気の中でしばし埋没していた。丁度ユーリズミー舞踊練習が行なわれており見せてもらったが「人間の霊」を表現しているのであろうか。空間に飛翔する如くセミのような衣をまとい舞っておりこの舞台上においても神秘的なものを見出した。

南東隅の最上にシュタイナーの記念室と墓所があり、ここを訪れた時強い緊張感と大いなる感激を受けた。記念室には第1次ゲーテアスム、第2次ゲーテアスムの設計に際しデザインした模型・彫刻・スケッチ等が展示されておりシュタイナーのゲーテアスムに寄せた努力と、これらに費した情熱と才能を感じることができる。記念室の左奥に墓所下っていく階段があり踊場にノミの跡を残したシュタイナー自作の巨大な木彫が据えられている。天井からはトッライトを通して柔かい明が彫刻に投げかけられている。この彫刻は巨大な人間像が中央に立ち左手は天を右手は地を指し宇宙と自然を祝福している。周りに地獄に落ち、苦悩にゆがむ人間が逆吊りに、そしてすがりつく形態を表わしており長いこと見ているのが息苦しくなる迫力を持っており、地獄で身もだえる一人一人の顔を見ると人間の心の中に起る様々な顔を表わしているように思われてならない。南側入口ホールの階段を上った右手の絵画室には、シュタイナーの単彩画が展示されており、学生達は三脚を立て品の良い老女史の指導のもとにシュタイナーの思

想を現象にするべく絵筆を動かしていた。シュタイナーの絵は赤黄青が基調でどれも心の動きを表現しているように思われた。太陽が昇りそして沈む、二点の連作絵には希望と沈静を表わしており、全て相異なる両極にあるもの、上昇と下降・天と地・吸収と反発・物質と霊などをテーマにしている。これは闘争の中より生れる調和の世界と人類愛の実現を願望するがゆえにちがいない。次いで私はルドルフ・シュタイナーが最後の息を引きとった質素な木造のアトリエに案内された。アトリエは雨漏りによる汚れた天井にもかかわらず清潔に保存されていた。そこには彼のデスマスクがコーナーに静かな冷たい空気の中に安置され両側に鉢植が前に紅い生花が捧げられていた。生前彼が製作した彫刻が壁の黒いビロードの布の上に配列されシュタイナーの霊を見守っている。

最後にシュタイナーの墓に安置されていた彫刻の石膏模型の仕事場を訪れ、巨大な人間像と対峙したがそのすさまじさに圧倒され、耐えがたく思苦しくなった。この厳粛な空気の中より逃れ出て冷たい小雨の降り続く外に出た時、ホット息をつかずにはおれなかった。恐らく私達があまりに現実との繋がりの中に生きているからに他ならないのであろう。

翌日再び Dornach を訪れ、丘の上の Geotheanum の囲りに付属する建物を見て歩いた。どれを取り上げても説明する事が不可能な為、写真によって自分の心でシュタイナーの思想を読み取っていただきたい。機会あってヨーロッパを訪れる建築をしている人は皆、ぜひこの建築を見ていただきたい。この丘に登ると私達が失ってしまったものを見出すにちがいない。この坂を都合6回登り下りしたが再び、この坂を登る日が来ることを願う。更に時間があるなら Dornach を訪れた足で、スイス国境に近いフランスのベルフォート駅よりバスで1時間程の距離にある、ロンシャンの巡礼聖堂を訪れ、東側のチャペルとチャペルの間の小さな出入口の扉に貼られている白い紙にコルビジェ自筆になる

In building this chapel
I wished to create a place of silence,
Prayer of place and spiritual joy.

L. C. 25/6/1955

を読むと製作以前の願いこそが、我々の感動を引き起こす素因となっていると感じる。

私はルドルフ・シュタイナーとコルビジェ両者の製作態度に共通するものを見たと思った。

ヨット部便り

潮 路

星 野 信 夫



風がいきをする。
フーと吹いては休み
フーと吹いてはやむ
一体、風のやつはどっちを向いて
いるのだ。

スタートの時はせまる。
太陽はおしげもなく光を投げ
濡れた皮膚は陽の光りに映え、
スキッパーは、風のやつを必死に
追う。

ドーン、スタートの合図
風のやつは、相変らずいたずらを
続ける。

風がいきをする
フーと吹いては休み
フーと吹いてはやむ
一体、風のやつはどっちを向いて
いるのだ

体をヨットの外に投げ出し
目は風見を読み、風を追う。
シバーしていたジブが風を受け始
める。

それ、風のやつを掴まえたぞ
やつを逃すな、ジブに受けメイン
に流せ、

それ、タックだ
ゴール目ざして走り続けるのだ。

1日のセーリングを終え、一路ハ

ーバーへ向う。太陽は今、海の彼
方に沈もうとしている。海面は、
銀板を敷きつめた様にぎらぎらと
照り映え、まぶしい中に真黒な我
々の影を落し、真白な入道雲は、
オレンジ色に変わる。

波は、穏やかだがヨットは夕陽の
前に恥らうように揺れ動く。

何んとも云いようのない美しさで
ある。この時が、ヨットマンにと
って一番ほっと一息つき、いろい
ろと思いを馳せるのである。

ふと恋人の事を思う人もいるであ
ろう。

まだ、恋人とまでいかない彼女を
思う人もいるであろう。

しかし、波は無言であり、寄せて
は引き、引いては寄せ続ける。

ヨットを艇庫へ、
これから生ビールの乾杯があると
思うと、片付けも早い。

ぐっとジョッキをあける。このう
まさ！

今迄、セーリングして来た海を眺
め、時のたつのも忘れた昼間の話
しの続きが始まる。

ここには、先輩も後輩もない。
大いに語らい、discussするので
ある。

社会、経済問題あり、仕事の問題
あり、勿論、恋愛問題もある。時
にしてこの問題が一番多い時があ
る。

これが我々ヨット部の1日であ
る。

私がヨットを始めてから3年目の
夏に向かおうとしています。海
は時に親父の様にはげしく荒れ厳
しさを与え、時にして御袋の様に
やさしく明日へのエネルギーを養
ってくれます。今日の様に、日一
日と目まぐるしく移り変る非現実
的な社会において、自然は我々を
大いに夢のある社会へと誘ってく
れます。

どうです、貴方も江の島に来て見
ませんか？ 御一人でいやなら、
そう貴方の恋人、彼女とのカッ
プルでも結構。たまには、海上ヨ
ットの上で1日を過すのも乙なもの
ではありませんか。

その時、我々ヨット部員は舟頭
になりぎり、御邪魔しないつもりで
すが……………。

興味のある方は、同窓会会長金田
氏を始め、告知板の欄に記載され
ている連絡先まで御一報下さい。

エボシ岩の四季

深 沢 治 男

アー、うまいあわびが喰いたい。

いやトコブシでもいい。

勿論ビールでだ。

江之島湘南港からヨットを出して、風の良い日はよくエボシ岩へ行く。茅ヶ崎の沖にある、25m位のトンガッタ岩が良い目じるしになる小島である。

接舷させるには、本当に注意していないと、岩礁にひどい一撃をくらわされかねない所である。島の影に入ると、ひっそりと波がなくなつて、曇日の時など、帯状に流れている白いアワが不気味に思われてくる、そんな所である。しかし天気の良い時は別だ。海の上、すべてが天国。

ノタリ、ノタリの波。

カモメ、カモメ。

我々の足元はまで迷い込んで来る。

イワシ、イワシ。

退屈な人間同士。

全て、すべて、オーライ。

港に帰らなければならない事なんぞ、まったく忘れてしまう。春のエボシは、唯もない島。落書も出来れば、立ションベンもカンタン。

夏のエボシは。そー、女がいる。

Gパンで泳いで、あがると水着になるような女ドモ。

そして、プラスチックのビクに、空気を送り込む装置を仕込んで、岩の間を泳ぎ廻る生きた傑作を、

採集するボーヤがいる。

こんな事もある。土地の漁師のせがれ達だろう、たくましいのが3～4人、岩の上にはい上って来た。パンツに、グローブのようなでかい手をつつ込むと、2つ、また3つとアワビを取り出して来る。サザエもある。よくまあ入っているもんだ、こんなに。獲物をみんな岩の上にならべて、等分する。アー、このアワビは、パンツの下にいたのだ。そんな、そんなアワビに、ショージュをつけて、カックリと食べたい。

勿論、ビールでだ。

秋のエボシは、また誰もいない。岩をよじ登ると、風が強くて、50cm四方の頂上に立上るのがおっかない。目の下に、くだける白い波の音と、岩はだにからむ風の音が、心なし弱まった太陽の光で、とてもとても、かなしくなってくる時。

冬のエボシ。

これを私はまだ知らない。

我々の腕と、ヨットが、そこへ行くのを、チョットした冒険にしているからだ。

海鳥だけしか、来ていないのかも知れない。

年末は、一年間一緒にヨットで知り合った者同士で、納会をもった。江之島のばかでかい旅館に宿をとり、よんどころない話しに興じていたけれど。忘年会のざわめきが帰ってしまった後の空間は、

小さな黒い波の音と、時々、通りすぎるオートバイの音で、なかなかいける。その翌日、ひさしぶりに燈台に行った。古びたエレベーターで昇って行くと、360°海。下も海、遠くも海。ヨットハーバーもチッサイ。しかし、まてよ。どーもおかしい。この風の強い日、さすがクルーザー。一パイは出ていたけれど、どうも、もたついている。帆をまいてしまった。何かあるかと、20円の望遠鏡に飛びつく。

ヤッテマス。

スナイプが一パイひっくり返ってます。濃紺の船腹に、黒シャツの男が2人、しがみついています。クルーザーは、それを助けにかかっていたのです。一人がガンバツテ、艇を起しにかかっています。ダメです。救助のボートが出て行きました。冬の海水は、あたたかくはないでしょうねー。

チョットしたトラブルです。私達は悲しくも、コートのエリを立てて、空の方にいました。

また、四季はめぐります。

そー、もー、海です。今年こそ、クルーザーを同窓会でもちたいと思います。そして、メカニクな装置を組込んで、揺れるコンロで飯を炊いて。ひっかけたばかりのサバをブツ切って、サシミに食べるのです。アワビも、サバも、カツオも、ビールも、海水も、皆んなで飲んで、食べるのです。

職場を語る

関根 康夫 (建築41年卒)

私は6年前に学校を卒業して、二つの会社(最初の会社は倒産)を経て叔父が経営している従業員200人ほどの我が国唯一の犬の鎖の生産会社に入りました。一般の方は気にもかけないでしょうが、犬の鎖にも歴史がありそれを語ると長くなるのでやめますが、唯一つ言えば、日本の一般に使われている鎖は、長さ1.5m前後のものです、アメリカへ輸出しているものは4~5mくらいもあり、そんなところにもアメリカの広さがうかがわれます。そして、うれしいことにこんな鎖などには大企業が手を出さないし、わが“お犬様”が小便とくそをたれて運動をしていると、犬鎖は、必要以上に早く切れてくれますので、安定企業の仲間入が出来るというわけなのです。私はそんな会社の重役にでもと思って入ったのですが、会社としてそんなに甘くはありません。月々飢えをしのぐほどの給料をもらいながら私は当社の総売上上の四割しか占めない犬の鎖以外の鉄骨、その他の生産業務に携わっているわけです。この方面は私が入社してから企画されたもので設備器具も人材も不足しており思うにまかせませんが、建築を学び、しかし、設計などの才のない私は、鉄鋼業務を我が職場にしようと、密かに決めております。H鋼の切断機、現寸場、現寸工、等も欲しいと思いながら社長でないことをつくづく悲しみ、時計の時間さえ読めない人々を相手にしながら先生、先生などと叫ばれて字も書け、時間も読めることを誇りに思いながら月産1,000トンを夢みて毎日を過しております。

運営委員会報告

■第22回運営委員会 昭和45年10月6日

1. 第5回定期総会の件
2. 会誌3号発刊の件
3. 会費徴収の件

■第5回定期総会 昭和45年11月1日

1. 4年度事業及び会計報告会計監査報告
2. 5年度事業及び予算案
3. 新役員選出

会長 金田昭治 副会長 木村幸弘 藤井正伸
会計 小儀一男 会計監査 宮島隆則 宮沢孝夫
事務局長 小高鎮夫

■第23回運営委員会 昭和46年1月22日

1. 新役員の顔合せ
2. 新事業計画の検討
3. 会誌3号編集報告
4. 京阪神地区別懇談会大阪で開催の件

■第2回地区別懇談会 昭和46年1月22日

京阪神地区別懇談会大阪で開催

■第24回運営委員会 昭和46年5月11日

1. 昭和46年度学園同窓会協議会の件
2. 会誌3号発刊報告
3. 学生コンペについて

■ヨット部、ヨットクルージング 昭和46年6月~8月毎日曜日江の島で新会員もふえ同窓会の意義が大いに上った。

■第25回運営委員会 昭和46年9月17日

1. 東京地区別懇談会の件
2. 建築学科同窓会第6回総会の件
3. 同窓会誌第4号編集方針及び原稿募集の件
4. 運営委員会構成再検討

■第3回地区別懇談会 昭和46年9月26日 東京地区懇談会ホテルオークラにて開催

■第6年度事業計画

昭和46年10月1日~昭和47年9月30日

1. 同窓会誌第4号発刊
2. 厚生部会活動促進

ヨット部 夏季3カ月間毎日曜日江の島で開催
山の家 7月最終土曜日工学院大山の家で開催
囲碁部 毎月定例会、第1土曜日

運営委員会報告

- その他 釣大会, マージャン大会, ゴルフ大会計
画中
3. 名簿発刊 46年3月新卒業生分追加印刷
4. 本部活動 運営委員会年4回以上 3役員会必要時
5. 準会員援助 学内コンペ及び学祭援助
6. 校友会との関係改善 積極的に一体化を促進
7. 総会及び懇親会 学祭開催中の日曜日又は11月3日

会計報告

■第5年度決算報告

自昭和45年10月1日 ～ 至昭和46年9月30日

歳 入 の 部	
(1) 前年度繰越金	7,917,076
(2) 会費等収入	2,531,395
学生会員入会金会費	2,479,280
卒業生会員入会金会費	52,115
(3) 預金利息	498,534
貸付信託利息	377,685
定期預金利息	100,873
普通預金利息	19,976
合 計	10,947,005

歳 出 の 部	
(1) 同窓会会誌発刊費	590,310
印刷, 製本費	350,000
編集諸経費	34,100
発送諸経費	206,210
(2) 各部会経費	16,000
ヨット部ヨット使用料	16,000
(3) 名簿発刊費	48,195
名簿印刷費	46,800
名簿送料	1,395
(4) 本部経費	75,810
会議費	24,670
事務用品費	12,660
通信費	9,100
京阪, 地区懇談会経費	29,380
(5) 準会員援助金	73,536
学祭援助金	50,000
競技設計援助金	23,536
(6) 事務員給料	240,000

(7) 総会費	103,492
総会通知料	48,780
総会通知宛名書経費	22,702
懇談会経費	12,210
総会通知印刷費	19,800
(8) 学園同窓会分担金	424,793
46年度分担金	260,956
会報分担金	31,500
懇談会分担金	132,337
(9) 予備費	
学園同窓会関係援助分担金	15,000
小 計	1,587,136
(10) 次年度繰越金	9,359,869

合 計	10,947,005
-----	------------

■第6年度予算

自昭和46年10月1日 ～ 至昭和47年9月30日

歳 入 の 部	
(1) 前年度繰越金	9,359,869
(2) 会費等収入	2,710,000
学生会員入会金・会費	2,650,000
卒業生会員入会金・会費	60,000
(3) 預金利息	570,000
貸付信託利息	550,000
普通預金利息	20,000
合 計	12,639,869

歳 出 の 部	
(1) 同窓会会誌発刊費	650,000
(2) 各部会経費	80,000
(3) 名簿発刊費	100,000
(4) 本部経費	80,000
(6) 準会員援助金	100,000
(6) 事務員給料	240,000
(7) 総会費	120,000
(8) 学園同窓会分担金	400,000
(9) 予備費	50,000
小 計	1,820,000
(10) 次年度繰越金	10,819,860
合 計	12,639,869

○45年度第2回 課題「住宅」

出題者 山下司助教授

昭和45年度第2回は昭和46年3月に締切られました。学費闘争のストライキの最中でしたので、あまり成果が得られなかったようですが、応募点数22点中、入選及び佳作が7点選ばれました。

□入選

1席 該当者なし

2席 3名 賞金 5,000円

1部建築4年 利根川一

2部建築1年 近藤英雄

2部建築4年 三枝繁良

奨励賞 2名 建築学科同窓会賞として雑誌「都市住宅」を授与

1部建築2年 藤木正則

1部建築2年 吉田 滋

アイデア賞 2名 建築学科同窓会賞として雑誌「都

市住宅」を授与

1部建築3年 村田英男

2部設備3年 大倉民夫 佐藤純男

○46年度第1回 課題「セミナーハウス」

出題者 武藤章助教授

今回もストライキのあおりを受けてか、低調であったようですが、9月7日に締切、学祭において展示発表しました。

□入選

1席 該当者なし

2席 1部建築4年 越智満男

2部建築4年 二宮正一

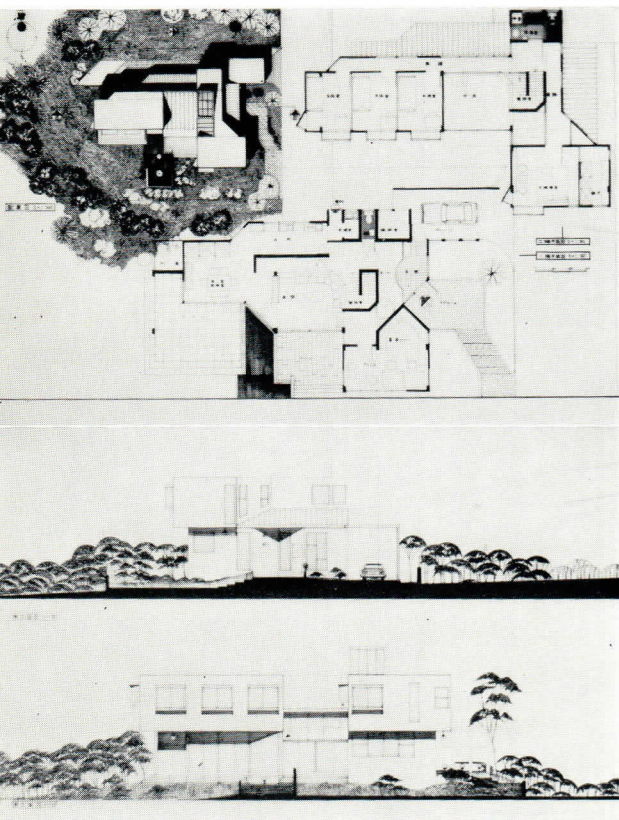
佳作 1部建築3年 石川勝意 丸上洋司

1部建築3年 藤木正則

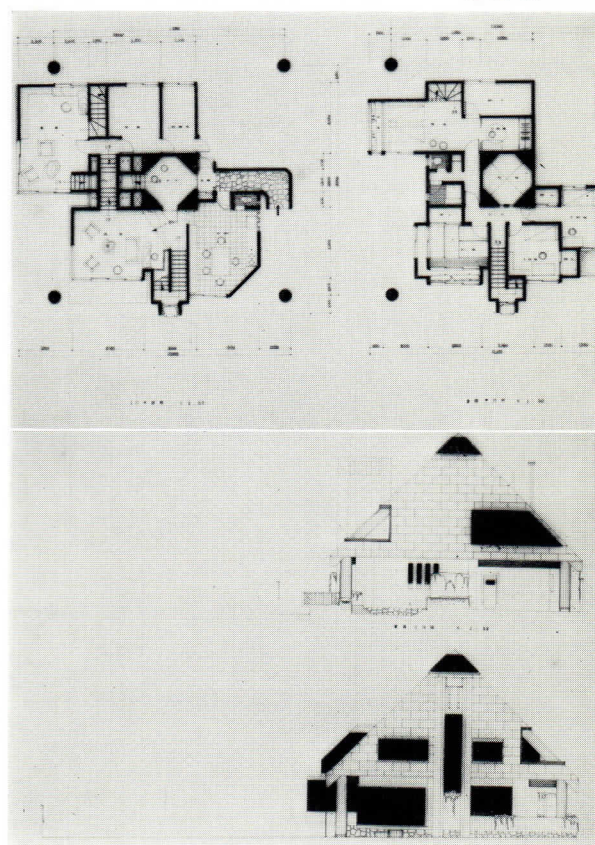
1部建築3年 神之門栄

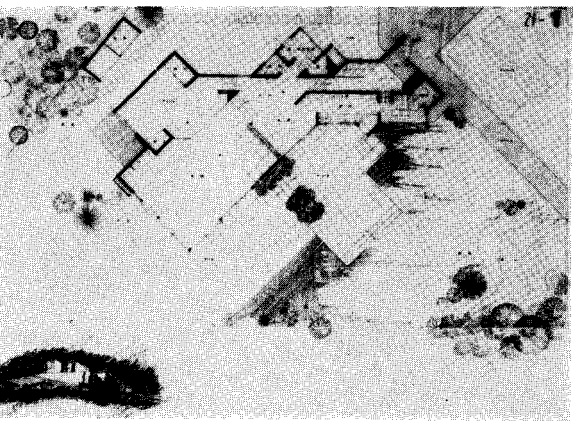
課題「住宅」

利根川案

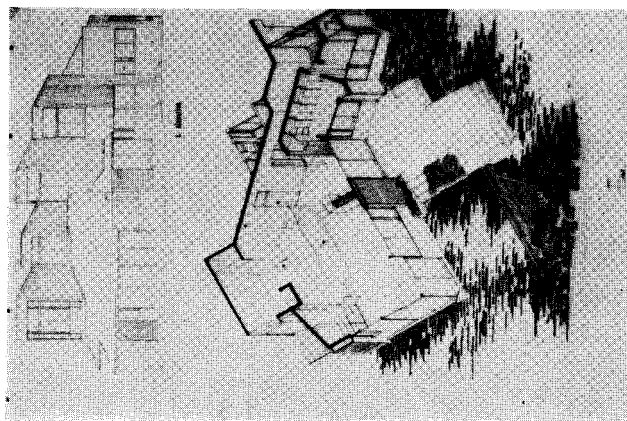


近藤案



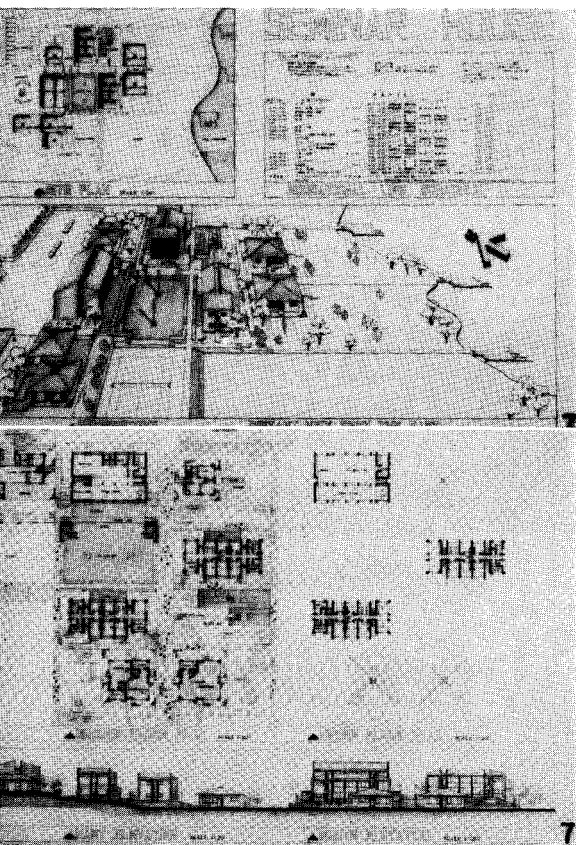


三枝案

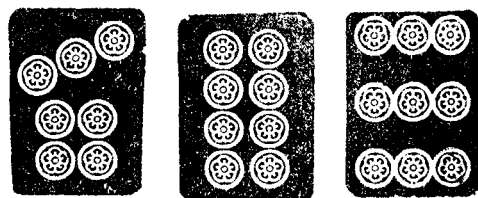
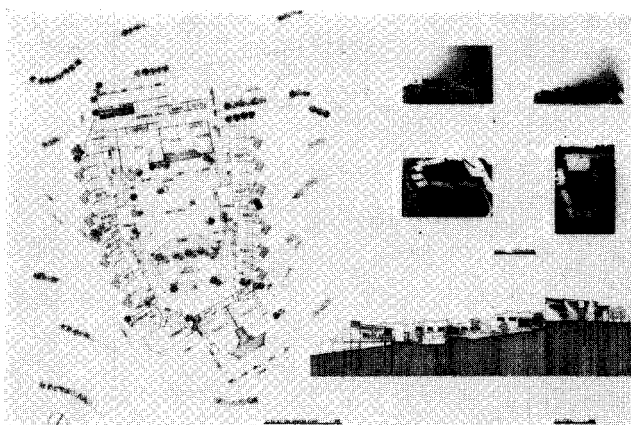


課題“セミナーハウス”

城智案



二宮案



学校創立85周年を 迎えて

建築学科同窓会

会長 金田昭治

明治21年に東京築地に工学院大学の前身、築地工手学校が創立して、今年で85周年になります。

創立当時の目的は、正式教育を施す学校が日本にも数少く、工業界より待望されて、東京大学の教授陣により設立されました。学生は昼間実業に従事している、勤労青少年で夜間授業でありました。先生方は東京大学の教授が直接授業を行いレベルも相当高いものでした。そこで優秀なる卒業生を数多く社会に送り出し、各界で同窓生が活躍しております。

関東大震災での校舎焼失後、昭和3年に現在の位置新宿に鉄筋コンクリート造の新校舎が落成し、校名を工学院と改められました。

新校舎建設の際は、出身者及び学校の先生が一体となって、寄附金を募集し立派な校舎が完成しました。教授、学生、同窓会員と親しく心が結び付き、目的に向って協力し合ったということは心から敬服致します。

第二次大戦終戦後、大学ができてから学生数が急激に増加し、新宿校舎のみでは収容することができなくなりました。八王子に校舎を建設し、諸設備が拡充されました。

現在工学院大学学園には、八王子に附属高等学校、大学一部二学年迄と、新宿には専修学校、大学

二部、一部三学年より、大学卒業後、工学専攻科、大学院修士課程、博士課程があります。

創立85周年を迎え、学園の歴史を振り返ると共に現在を認識し、私達の進むべき方向を探し求めたいと思います。私達に不足しているものは、お互いの心の触れ合いです。教授と学生、学校と同窓会員、お互いに心の繋がりを保ちながら、真の目的を追求したいと思います。大学教育の目的は高度の能力を身に付けた、人間性豊かな社会人を養成することだと思えます。工学を学んだ人は社会では技術屋と呼ばれ、専門分野では権威者であっても、広い社会から見ると視野の狭い精神的な「かたわもの」になりがちです。それでは困ります。そこで私達は原点に戻り、工学院大学に学んだ当時のことを思いだそう、現在自分を形成している重要な部分が、工学院大学時代にその基を形成されたと思えます。大学時代に建築学を専門に学び、社会に出て建築を職業とし、家庭を築き、建築界においては重要な位置を占めます。私達と工学院大学建築学科とは切っても切れない関係です。

現在の私達に欠けているものは工学院大学を卒業後学校との結び付きです。社会へ出ると仕事が忙しくて、なかなか学校を思う暇がありません。でもそれではいけないと思います。母校を愛し、母校を大切に見守りましょう。母校愛は私達の人間性のシンボルだと思えます。歴史の古い母校は、個人に例えたら、年寄の親と同じで

す、私達卒業生が全員で見守る必要があると思います。

工学院大学創立85周年を迎え、学生、教授、同窓会員、お互いに手を取り合い、心を一にし、工学院大学の発展のため、私達お互いの進歩のため、なお世界の平和のため前進しようではありませんか。

告知板

■原稿募集

テーマ 自由

イラストレーション 表紙 トップページ

写真構成

会誌の愛称

提出先 工学院大学学園同窓会内
建築学科同窓会宛

締切り 11月30日まで

■クラブ活動

ヨット部

7月～9月（定期旬間）場所、江の島

会費 600円

初心者の方でも昔船乗りだった人でも結構です。あなたの自由時間を採して海に集ろう。

連絡先 渋谷区幡ヶ谷 1-5-3

平和ビル3階 日本都市
建築事務所 電話 (376)

2711, 5965 金田昭治

中央区京橋 3-6 下村ビル

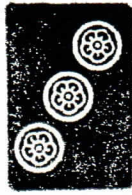
KK東京グラフィック・
デザイナーズ 電話(271)

3981 環境建築設計室

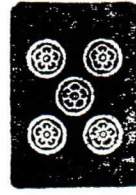
深沢治男

■同窓会連絡先 新宿区西新宿区

1の24の2 工学院大学建築学
科同窓会 (342) 1211



編集後記



S 「もしもし、Kさんいますか？」
A Man 「今、外出中です」
S 「あっ、そうですか。それでは又、のちほど」
S ぼやく
S 「彼は多忙なんだなあ」
1週間経って
K 「もしもし、Sさんいますか？」
A Lady 「今現場に出ています」
K 「あっ、そうですか。それでは又、のちほど」
K ぼやく
K 「Sになかなか連絡とれないなあ」
そして数日過ぎる。
K 「もしもし、Sさんいますか？」
A Lady 「今日はもう帰りました」
そして次の日、
S 「もしもし、Kさんいますか？」
A Man 「外出中です」
そして数日過ぎる

K 「Sさんいますか？」
A Lady 「外出中です」
そして次の日
S 「Kさんいますか？」
K 「私、Kです」
S 「ああ、やっとつかまったなあ」
K 「ああ、やっとつかまったなあ」
「なんだい」
S 「同窓会の会誌の編集が纏まらないんだよ。今年も、助けてくれよ。いい写真があったら頼むよ」
K 「よしわかった。暇がとれたら連絡するよ」

とこんなぐあいでは、この会誌も無事まとまった。いつも次号はゆっくり、落ちついてやろうといいながら、いつも、時間ぎりぎりまで追いつめられる。それでも次は、余裕をもってやろうと思う。でもきっと、デッドラインまで追いつめられるのだろう。

SONODA 記

